
南埼玉郡菖蒲町

菖蒲城跡

主要地方道川越栗橋線関係埋蔵文化財発掘調査報告

1999

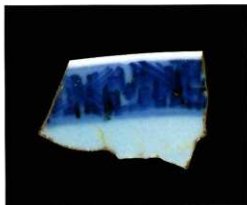
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



板碑



五彩表 (左)



五彩裏 (右)



染付



青磁



鉄釉皿・天目茶碗



灰釉皿

序

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを進めています。交通施策においては、県内1時間道路網構想の推進や公共交通機関の整備が進められています。これらの構想では、単に利便性の向上だけでなく、防災や交通安全にも十分配慮されたものとなっております。

菖蒲町を通る主要道には、町内を南北に貫く国道122号線とそれに交差する主要地方道川越栗橋線があります。主要地方道川越栗橋線は、昨今の道路事情により交通量が増えており、また、公共交通機関としてのバスの路線にもなっています。バス路線は沿線住民の重要な足となっておりますが、その一方でバス停車が交通渋滞の要因となったり、また、乗降時の安全が確保できず交通事故の要因になりかねない状況となっております。そこで交通の迅速化と安全性の確保を目的として、主要道路の一部を拡張しバス停車場を確保することとなりました。

道路拡幅用地内では、周知の埋蔵文化財包蔵地として、菖蒲城跡の一部が該当しました。上記埋蔵文化財の取扱いについては、関係諸機関で慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。発掘調査は埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整に基づき、埼玉県土木部道路企画課の委託を受けて、当事業団が実施すること

になりました。

菖蒲町は、県指定有形文化財久伊豆神社本殿、同天然記念物菖蒲のフジなどが広く知られ、文化財に恵まれた土地柄であります。特に、鎌倉時代から戦国時代にかけて、武士が歴史を彩り、活躍した舞台でもありました。

発掘調査の対象となった菖蒲城は、今までその実態があまり知られておりませんでした。本調査では、極めて限られた範囲内での発掘にもかかわらず、中国からの輸入品である陶磁器類が多く出土するなど、菖蒲城の性格を知る上で重要な成果をおげることができました。

本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広く活用していただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査から報告書の作成に至るまで、多大な御指導・御協力を賜りました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県土木部道路企画課、同杉戸土木事務所、菖蒲町教育委員会並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成10年11月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、埼玉県菖蒲町に所在する菖蒲城跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表番地及び発掘調査届けに対する指示通知は以下のとおりである。
菖蒲城跡（略号 SYUB）
南埼玉郡菖蒲町大字新堀977番地1他
平成8年8月9日付け教文第2-87号
3. 発掘調査は、主要地方道川越栗橋線建設に伴う事前調査である。埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県土木部道路企画課の委託を受けた財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第1章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については浅野春樹、書上元博が担当し、平成8年8月1日から平成8年10月31日まで実施した。整理報告書作成事業は伴瀬宗一が担当し、平成10年9月1日から平成10年11月31日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量および航空写真は株式会社シン技術コンサルに委託した。巻頭写真は小川忠博氏に委託した。
6. 発掘調査時における遺構写真撮影は浅野、書上が行い、遺物の写真撮影は伴瀬が行った。
7. 出土品の整理および図版作成は伴瀬及び調査員補の遠山実生が行った。
8. 本書の執筆は、第1章第1節を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護が行った。第5章第2節を浅野が行い、その他の執筆と編集を伴瀬が行った。
9. 本書に掲載した資料は平成8年度以降埼玉県埋蔵文化財センターが管理・保管する。
10. 本書の作成に際し、下記の方々から御教示・御協力を賜った。（敬務略）
三ツ木貞男・藤澤良祐・加藤真司・菖蒲町教育委員会・（財）瀬戸市埋蔵文化財センター・土岐市美濃陶磁歴史館・（財）土岐市埋蔵文化財センター

凡例

本書における挿図指示は次のとおりである。

1. X、Yによる座標表示は国家標準直角座標第Ⅱ系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
2. 発掘区のグリット割りは、調査範囲の制約から独自に設定した。各グリット杭の座標は以下のとおりである。

	X座標	Y座標
A 1 グリット杭	6507.786	-21179.842
A 2 グリット杭	6501.028	-21187.215
A 3 グリット杭	6494.271	-21194.587
A 4 グリット杭	6487.514	-21201.959
B 1 グリット杭	6498.189	-21171.054
B 2 グリット杭	6191.435	-21178.429
B 3 グリット杭	6484.683	-21185.801
B 4 グリット杭	6477.927	-21193.178

3. 遺構の表記記号は次のとおりである。

S J…号住居跡 SK…土壌

SD…溝 SB…掘立柱建物跡

4. 遺構挿図の縮尺は次のとおりである。例外的なものについてはスケールで示した。

遺構全測図 1/200

住居跡・掘立柱建物・土壌・小穴群 1/60

5. 遺物挿図の縮尺は次のとおりである。例外的なものにはスケールで示した。

陶磁器 1/4 土器拓影図 1/4

石製品 1/2 鉄製品 1/2

6. 遺物観察表の計測値は、()内は推定値、< >内は現存部の計測値で、単位はcmである。
7. 遺物観察表の色調は新版標準土色帳に準じて細別したが、厳密ではなく概ねである。
8. 遺物観察表の胎土は、最も多量に含まれる含有物を略号で示した。

A…赤色粒子 B…白色粒状

C…黒色粒子 D…白色針状物質

E…ガラス質黒色粒子

F…ガラス質透明粒子

G…ガラス質半透明粒子

H…砂粒子 I…片岩

9. 遺物観察表の焼成は次のとおりである。

A…良好 B…普通 C…不良

10. 本文中や図版にある(49-27)のような表記は、第49図27という意味である。

目次

口 絵
序 言
例 例
凡 例
目 次

I. 発掘調査の概要	1	a. 土製品	42
1. 調査に至るまでの経過	1	① 土師器	42
2. 発掘調査・報告書作成の経過	2	② 内耳鍋	44
3. 発掘調査・報告書刊行事業の組織	3	③ 播 鉢	52
II. 遺跡の立地と環境	4	④ 陶磁器	59
III. 遺跡の概要	7	⑤ 土 鏝	60
IV. 遺構と遺物	13	b. 金属製品	60
1. 縄文時代	13	① 鉄製品	60
2. 平安時代	14	② 古 銭	63
(1) 住居跡	14	c. 石製品	63
(2) 溝跡	14	① 硯・石臼・砥石	63
(3) 土塋	18	② 板碑	63
(4) 小穴	30	③ 軽石・石	68
3. 中世	32	V. 調査の成果	77
(1) 遺構	32	1. 菖蒲城跡出土の土師器皿について	77
a. 堀状遺構	32	2. 菖蒲城跡出土の陶磁器について	93
b. 土壘状遺構	32	附編 1	97
c. 小穴	35	附編 2	102
(2) 遺物	42		

挿図目次

第1図	埼玉県の地形	4	第34図	B1グリッド出土状況図(1)	47
第2図	周辺遺跡の分布図	6	第35図	B1グリッド出土状況図(2)	48
第3図	菖蒲城跡地形図	8	第36図	B1グリッド出土状況図(3)	49
第4図	菖蒲城跡平安時代全測図	9	第37図	B2グリッド出土遺物(1)	50
第5図	菖蒲城跡中世全測図	10	第38図	B2グリッド出土遺物(2)	51
第6図	菖蒲城跡断面図	11	第39図	B2グリッド出土状況図(1)	53
第7図	第1・2号土壇・出土遺物	13	第40図	B2グリッド出土状況図(2)	54
第8図	第1号住居跡・出土遺物	15	第41図	B2グリッド出土状況図(3)	55
第9図	第1・2号掘立柱建物	16	第42図	B3・B4グリッド出土遺物	56
第10図	第1号溝跡	17	第43図	東区出土遺物	56
第11図	第1号溝跡出土遺物・第2・3・4号溝跡	18	第44図	B3グリッド出土状況図	57
第12図	土壇(1)	19	第45図	B4グリッド出土状況図	58
第13図	土壇(2)	21	第46図	表採遺物	58
第14図	土壇(3)	22	第47図	染付・青磁・白磁・五彩	61
第15図	A1グリッドピット群	23	第48図	東区陶磁器出土分布状況	62
第16図	A2グリッドピット群	24	第49図	土錘	64
第17図	A3グリッドピット群	25	第50図	鉄製品(1)	65
第18図	A4グリッドピット群	26	第51図	鉄製品(2)	66
第19図	B1グリッドピット群	27	第52図	古銭	67
第20図	B2グリッドピット群	28	第53図	硯・石臼・砥石(1)	69
第21図	B3・B4グリッドピット群	29	第54図	硯・石臼・砥石(2)	70
第22図	堀・土塁状遺構	33	第55図	硯・石臼・砥石(3)	71
第23図	堀・土塁状遺構断面図	34	第56図	板碑(1)	71
第24図	西区堀状遺構出土遺物	34	第57図	板碑(2)	72
第25図	西区堀状遺構出土状況図	35	第58図	板碑(3)	73
第26図	A1グリッドピット群	36	第59図	板碑(4)	74
第27図	A2グリッドピット群	37	第60図	軽石・石(1)	75
第28図	A3グリッドピット群	38	第61図	軽石・石(2)	76
第29図	A4グリッドピット群	39	第62図	A～G出土範囲図	83
第30図	A1～4グリッド出土遺物	43	第63図	A～Gドット・破片図(1)	84
第31図	西区出土遺物	43	第64図	A～Gドット・破片図(2)	85
第32図	B1グリッド出土遺物(1)	45	第65図	A～Gドット・破片図(3)	86
第33図	B1グリッド出土遺物(2)	46	第66図	分布棒グラフ	91

図版目次

- 図版1 菖蒲城周辺
調査区全景
- 図版2 S J 1
SB 1・2
- 図版3 SD 1 (西区)
SD 1 (東区)
SD 2・3・4
- 図版4 平安時代全景 (西区)
平安時代全景 (東区)
S J 1 出土状況
- 図版5 堀状遺構 (西区)
堀状遺構出土状況
堀状遺構 (東区)
- 図版6 A 2 グリッド
A 2 グリッド出土状況 (1)
A 2 グリッド出土状況 (2)
- 図版7 A 3・4 グリッド
B 1 グリッド出土状況
B 3・4 グリッド出土状況
- 図版8 中世遺物出土状況 (東区・南から)
中世遺物出土状況 (東区・北から)
板碑出土状況
- 図版9 染付・灰釉・青磁・土師器出土状況
- 図版10 S J 1 出土遺物
西区堀状遺構出土遺物 (1)
- 図版11 西区堀状遺構出土遺物 (2)
A 2～4 グリッド出土遺物
- 図版12 A 3 グリッド出土遺物
西区表採出土遺物
B 1 グリッド出土遺物 (1)
- 図版13 B 1 グリッド出土遺物 (2)
- 図版14 B 1 グリッド出土遺物 (3)
- 図版15 B 1 グリッド出土遺物 (4)
B 2 グリッド出土遺物 (1)
- 図版16 B 2 グリッド出土遺物 (2)
- 図版17 B 2 グリッド出土遺物 (3)
- 図版18 B 2～4 グリッド出土遺物
- 図版19 B 3・4 グリッド出土遺物
表採出土遺物
- 図版20 青磁・香炉・丸瓦
- 図版21 軒丸瓦・常滑大甕・内耳鍋
- 図版22 内耳鍋
- 図版23 内耳鍋
播鉢
- 図版24 播鉢
- 図版25 天目茶碗・鉄釉皿
- 図版26 染付外面
青磁・白磁外面
灰釉陶器外面
- 図版27 染付内面
青磁・白磁内面
灰釉陶器内面
- 図版28 土鍾
火打金
- 図版29 鉄製品
- 図版30 古銭
- 図版31 土製品・小札・轡・彈丸・古銭
- 図版32 石臼
- 図版33 硯・茶臼・磁石
- 図版34 板碑

I. 発掘調査の概要

1. 調査に至る経過

埼玉県においては、人口の急増加や開発の進行によって、道路の渋滞が慢性的となっている状況が、いたるところで見られるようになってきている。このため、公共交通機関であるバスの停車が、さらに渋滞を悪化させたり、バスの乗降時の安全が確保されないといった問題が生じている。埼玉県では、主要道路の一部を拡張等することによって、これらの問題点の解消を図っているところである。

県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

平成7年10月9日付け杉土第994号で、杉戸土木事務所長より、県道川越栗橋線の自歩道及びバス停留所の工事予定箇所における、埋蔵文化財の取扱いについて照会を受けた。文化財保護課では、平成7年11月30日付け教文第925号で、次のように杉戸土木事務所長あて回答した。

1 埋蔵文化財の所在

事業地内には、次の周知の埋蔵文化財が所在します。

名称	種別	時代	所在地
菖蒲城跡 (NO.84-02)	集落・城跡	奈良・平安 中世	菖蒲町大字 新堀字菖蒲

2 取扱いについて

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存するのが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合には、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づく文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施してください。

なお、発掘調査の実施については、当課と別途協議願います。

その後、道路企画課、杉戸土木事務所と文化財保護課との間で取扱いについて協議を行ったが、計画変更による現状保存が困難であることから、記録保存の措置をとることとなった。発掘調査の実施機関である(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団を含めて、工事日程や調査計画等についての協議を行い、平成8年8月1日から10月31日までの期間で、発掘調査を実施することとなった。

文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条1項の規定による発掘調査届が、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。発掘調査に係わる通知は平成8年8月9日付け教文第2-87号で行っている。

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

発掘調査

平成8年8月1日から10月31日までの3ヵ月にわたり、葛蒲城跡の発掘調査を実施した。発掘調査面積は420㎡である。

8月初旬に事務所ユニットを設置した。発掘調査区は、主要地方道川越栗橋線を挟んで東西に分かれており、それぞれを西区・東区とした。重機によって両区の表土除去を行い、同時に、県道の交通量の多いことから安全対策上、囲柵を実施した。

地表下約50cmより中世の遺構・遺物を検出した。また、8月中旬には基準点測量を行い、調査区内に測量杭を設置した。細長い調査区という制約により、国家座標の方眼とグリッド杭方眼とは一致していない。グリッド杭の座標は、凡例を参考にされたい。

発掘調査は、遺物を掘り残すかたちで進み、ほぼすべての出土位置を記録した。9月上旬からは、遺構の測量図および遺物の出土状況図を作成した。9月中旬には遺物の出土状況の写真撮影、下旬には完掘状況を撮影した。

9月下旬には中世の遺構・遺物の調査を終了した。終了と同時に重機によって、平安時代の遺構面まで掘削した。

10月中旬まで発掘調査を行い、ほぼ同時に進行する

形で、遺構測量図を順次作成した。ついで、遺構の写真撮影を行い、10月下旬には、実質的な調査を終了した。10月30日に航空写真の撮影、現場ユニットの撤収、囲柵の撤去を行い、すべての調査を終了した。

整理・報告書刊行

整理作業は、平成10年8月1日から平成10年11月31日まで実施した。8月初旬から遺物の接合・復元を行う。中旬には、復元の終わったものから順次実測に入った。遺物の接合・復元は、ほぼ9月をもって終了した。それと並行して遺構図面の整理・トレースを進めた。遺構図面のトレースが終了したのは、10月末である。引き続き遺物実測図のトレースに入る。遺物の実測は10月中に終了し、遺物実測図のトレースは、11月中旬には終了した。

11月からは遺構と遺物の版組を開始する。11月中旬には、版組と並行して遺物の写真撮影を行い、終了したものから順次写真図版の割付け・編集作業を進めた。

10月中旬から11月までは原稿の執筆を行った。

報告書刊行作業は12月から行う。12月印刷業者を決定し、1月中旬より校正に入り、2月中旬には校了。2月に報告書を刊行する。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査

平成8年度

理事長	荒井 桂
副理事長	富田 真也
専務理事	吉川 國男
常務理事兼 管理部長	稲葉 文夫

管理部

庶務課長	依田 透
主査	西沢 信行
主任	長滝 美智子
主事	菊池 久

専門調査員兼
経理課長

主任	関野 栄一
主任	江田 和美
主任	福田 昭美
主任	腰塚 雄二

調査部

理事兼 調査部長	小川 良祐
調査部副部長	高橋 一夫
調査第三課長	村田 健二
主査	浅野 晴樹
主任調査員	書上 元博

(2) 整理事業

平成10年度

理事長	荒井 桂
副理事長	飯塚 誠一郎
常務理事兼 管理部長	鈴木 進

管理部

庶務課長	金子 隆
主査	田中 裕二
主任	長滝 美智子
主任	腰塚 雄二

専門調査員兼
経理課長

主任	関野 栄一
主任	江田 和美
主任	福田 昭美
主任	菊池 久

資料部

資料部長	増田 逸朗
主幹兼 資料部副部長	小久保 徹
資料整理第二課長	市川 修
主任調査員	伴 瀬宗一

II. 遺跡の立地と環境

菟瀨城跡の所在する南埼玉郡は、埼玉県東部に位置し、北葛飾郡および北埼玉郡と西側で接し、東側は北足立郡と接している。北埼玉郡の地理的な立地は、ほぼ全域を加須低地に包括され、また北葛飾郡は中川低地には含まれる。一方北足立郡では、大宮台地がおおむね全域を覆っている。これらの対照的な両郡の間において、南埼玉郡は双方の特色を兼ね備えている。

大宮台地の主要部とは、綾瀬川や元荒川などの解析によって分離しているが、郡中央部に大宮台地の支台群が広がる。この支台群を挟んで北側が加須低地、南側が中川低地に属する。

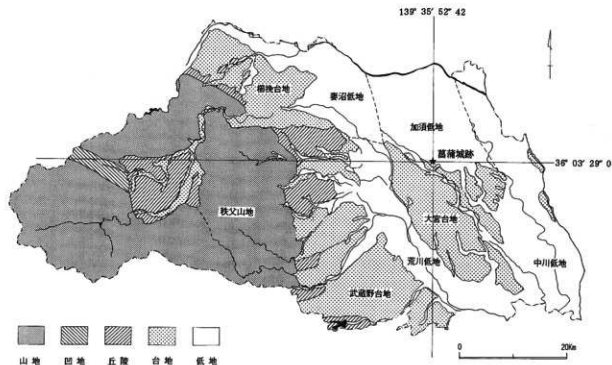
菟瀨町は、南埼玉郡の北部に位置し、巨視的には、上記のように加須低地が町のほぼ全域をおおっている。微視的には支台とも呼べない小さな島状のローム台地が点在し、現在の集落を形成している。桶川市境の元荒川を挟んだ対岸の相間地区、北東の小林地区、星川（見沼代用水）の左岸で、騎西町溝基・芋基から

西廻・三箇に至る地区などである。島状ローム台地は、北にいくに従い少なくなり、加須市至ってはほとんど見られなくなる。

また、これらの台地には、大宮台地西側の荒川に接する部分や、南側の中川低地に接する部分と大きく異なり、台地と低地の接点において明瞭な崖線を形成しないという特徴がある。以上は、加須低地を中心とするいわゆる関東造盆地運動による特異な地形特質である。

菟瀨城跡の立地は、星川によって形成された自然堤防（新堀地区）の後背湿地であり、野通川の氾濫原である。しかし、地下地形においてはローム層が検出され、以前は台地を形成していたことがわかる。第3章で詳細に述べるが、平安時代の遺構・遺物検出面はローム台地上面である。中世の遺構・遺物は、河成性のシルト層を挟んだ同層の直上から検出されている。このことから、中世の段階では、水の作用を受け、あ

第1図 埼玉県の地形



る程度沖積化していたものと考えられる。城の立地としては極めて特異である。

上記のような地理的環境では、鳥島のローム台地上に遺跡が立地することはもちろんとして、表層地質が沖積層であっても地下地形に埋没ローム台地が存在し、遺跡が立地すると言う状況がある。菖蒲城跡(1)や地獄田遺跡(18)は、一見沖積低地の真中にあり、このような埋没ローム台地に立地する遺跡の典型といえる。

地獄田遺跡(18)は、縄文時代後期から晩期および近世の集落跡である。表層地質は沖積地であるが、野通川の右岸の埋没台地上に立地する。下栢間遺跡(16)は、縄文時代・古墳時代・近世の複合遺跡である。下栢間のローム台地上に立地している。丸山下遺跡(21)は、縄文時代中期および古墳時代・平安時代、中近世の遺構を検出した。小林地区の集落をのせる微高のローム台地上に立地している。

6世紀代の天王山塚古墳(11)が下栢間の台地上に立地している。栢間地区にはこのほか「栢間七塚」と呼ばれる夫婦塚古墳(14)、禿塚古墳(15)、押出塚古墳(12)、富士塚古墳(13)、大日塚古墳(9)は、すべて栢間地区の台地上に立地している。ただし、菖蒲町の中においては加須の沈降運動中心地から最も遠い位置にある。元荒川対岸にある桶川市における大宮台地縁辺の比高差は明瞭である。ちなみに、この元荒川を望む台地の縁辺に加納城跡(2)がある。加納城跡では、青磁・白磁をはじめとして、瀬戸・美濃の灰釉陶器、天目茶碗、常滑の大甕などが出土している。

これ以前には、武蔵七党の野与党である道智氏(25)・多賀谷氏(26)、児玉党の久下塚氏(27)の館跡が伝承として伝えられているが、調査された例はなく、現在明確に遺構を確認することはできない。こ

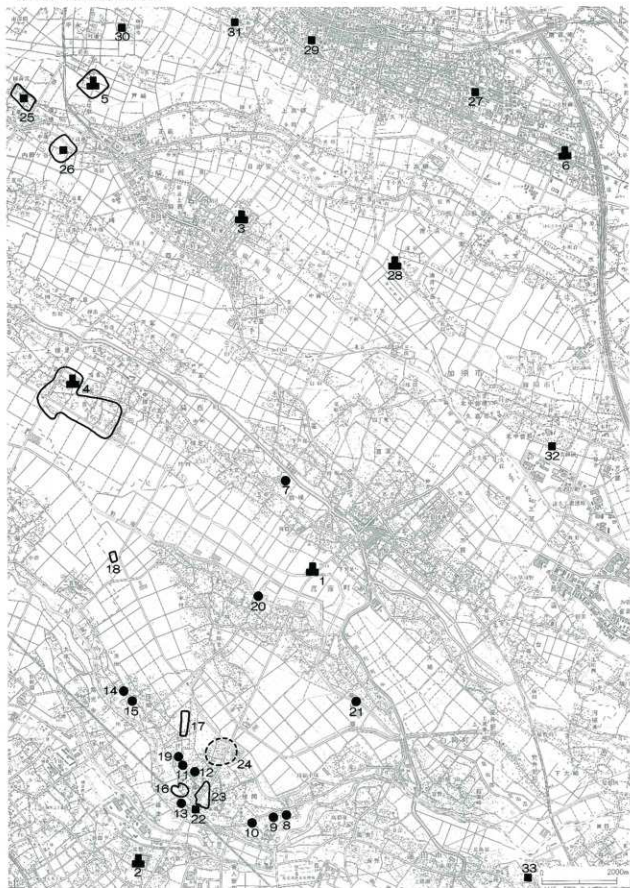
の状況は、平安時代後期からの、旧土地制度の崩壊と新たに荘園を経済基盤とする武士集団の台頭に丁度呼応している。そして在地の中小領主の同族の結合武士団が形成されていく。鎌倉幕府の成立を経て、北条執権政治の下、新秩序の安定期を迎えていたが、後醍醐天皇の元弘の乱(1331)を契機として南北朝の動乱期へと時代は移行して行く。

室町幕府が成立後、足利尊氏は次男基氏を初代の鎌倉公方として派遣する(1349)。一方、関東管領職は上杉氏の世襲となり、また武蔵国の守護を兼ねるようになっていった。鎌倉公方足利持氏は、上杉禪秀の乱を契機に将軍家との関係が悪化、関東管領上杉憲実とも対立した。持氏は幕府軍によって自害に追い込まれる(永享の乱1438)。その後、持氏の子成氏が鎌倉公方となるが、やはり対立し上杉氏との戦いに敗れ、下総古河に移り、古河公方と呼ばれることになる(1453)。これから後北条氏が北武蔵支配を確立する16世紀中頃までの約100年の間、主に山内・扇谷両上杉氏と古河公方の三つ巴の抗争が繰り返られることになる。『鎌倉大草子』には康正元年(1445)に、古河公方成氏が騎西城(3)の上杉勢を攻めるとあり、この頃には騎西城が存在したことがわかる。山内上杉氏は対抗上、深谷城を、扇谷上杉氏は家老大田資清(道真)をして江戸城・河越城・岩付城を築城させた。

発掘調査によると加須市花崎城(6)からは、15世紀末の古瀬戸系灰釉陶器が出土しているが、遺物の主体は16世紀であるという。菖蒲城跡は、康正二年(1447)に古河公方成氏の家臣、金田式部則綱が築いたと伝えられている。古河公方と上杉家との対立の中に生まれ、後に後北条氏の支配を受け、小田原城落城とともに廃城になる。

1 宮御城	2 加納城	3 騎西城	4 種重城跡	5 戸崎城	6 花崎城
7 物見塚古墳	8 栢間小塚遺跡	9 大日塚古墳	10 大御遺跡	11 天王山塚古墳	12 押出塚古墳
13 富士塚古墳	14 夫婦塚古墳	15 禿塚古墳	16 下栢間遺跡	17 神明神社東遺跡	18 地獄田遺跡
19 天王山北遺跡	20 東浦古墳	21 丸谷下遺跡	22 内藤氏陣屋跡	23 下栢間陣屋跡	24 橋井氏館
25 道智氏館	26 多賀谷氏館跡	27 久下塚氏館	28 鎌倉山(油井城)	29 設楽氏陣屋	30 明願寺館
31 礼羽氏館	32 鐘山	33 井沼堀の内			

第2図 周辺遺跡の分布図



Ⅲ. 遺跡の概要

菖蒲城跡付近の表層地質は、河成性の泥質堆積物である。つまり、星川（見沼代用水）によって形成された自然堤防（新堀地区）の後背湿地であり、星川や野通川の氾濫によって形成された。一見するとまさに沖積低地であるが、地表下約1.50mにおいてローム層を検出することができる。いわゆる埋没ロームである。

第3図菖蒲城跡地形図では、現在の地目によってトーンを入れた。白抜きが水田である。菖蒲城跡の石碑のある周辺は、現在あやめ田になっており一段高くなっている。発掘区地表面での標高は約12mである。ちなみに、相模地区の県道沿いで約13m、小林地区内の三角点で12.7m、両地区の中間の低地で約11m、菖蒲城跡から北東へ約300mほどいった自然堤防上の新堀地区で約12.6mである。

発掘調査の対象面積は、420㎡である。調査区が県道を挟んで両側に分かれているために、それぞれでは200㎡前後となる。第4・5図は時期別の遺跡全測図であるが、図の左側A1～A4グリッドを割り振ったのが西区である。同様に図右側のB1～B4グリッドまでを割り振ったのが東区になる。

遺跡は三つの時期から成り立っている。最も古い時期の遺構は、縄文時代の土壇で2基検出した。遺物は、縄文中期加曾利EⅢ式の深鉢形土器口辺部の破片1点と3Bグリッド一括採取として縄文早期の深鉢形土器胴部があった。検出面は、埋没ローム上面である。

平安時代の遺構検出面も埋没ローム上面である。検出した遺構は、竪穴式住居跡1軒、掘立柱建物跡2棟、土壇2基、小穴ピット群201基である。遺物は量的にも少なく、遺構に伴うものは限られていた。竪穴式住居跡からは、須恵器の長頸壺1点、須恵器杯2点、丸瓦1点である。長頸壺は頸部を欠いているほかは欠損がない。須恵器杯の2点のうち、ひとつは底部糸切り痕を残す完形である。残りは、口縁部の破片である。丸瓦は、表面は端面に沿ってナデ成形を施し、裏面に布目を残す。胎土、焼成、色調ともに第31図掲載の丸

瓦に酷似している。しかし、後述する理由によって両者は明確に区別される。

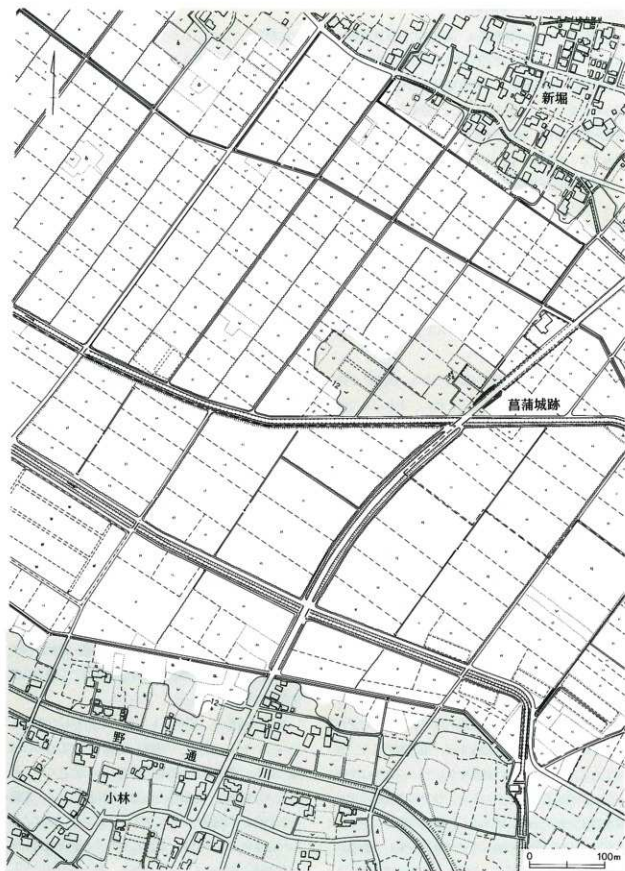
掘立柱建物跡2棟は、発掘区の制約上部分的な検出である。両者とも梁行・桁行とも二間分検出した。側柱掘立柱建物跡と考えられる。出土遺物はない。溝跡は4条検出した。SD1は東区・西区の両区から検出され、位置的にも形態的にも同一の溝と考えて間違いない。出土遺物に軒丸瓦がある。SD2～4は、東区で確認されているが、西区からは検出されていない。幅、深さなどの規模はSD1よりも小さい。出土遺物はない。

小穴ピット群は、192基検出した。東西区別では、西区で94基、東区で98基となり、総数では東区に多い。しかし、密度となると、B1グリッドがもっとも少なく、A1においてやや少な目、A2～A4までは特に集中する。おおよその傾向として、北東方向に希薄で、西方向で濃密になる。

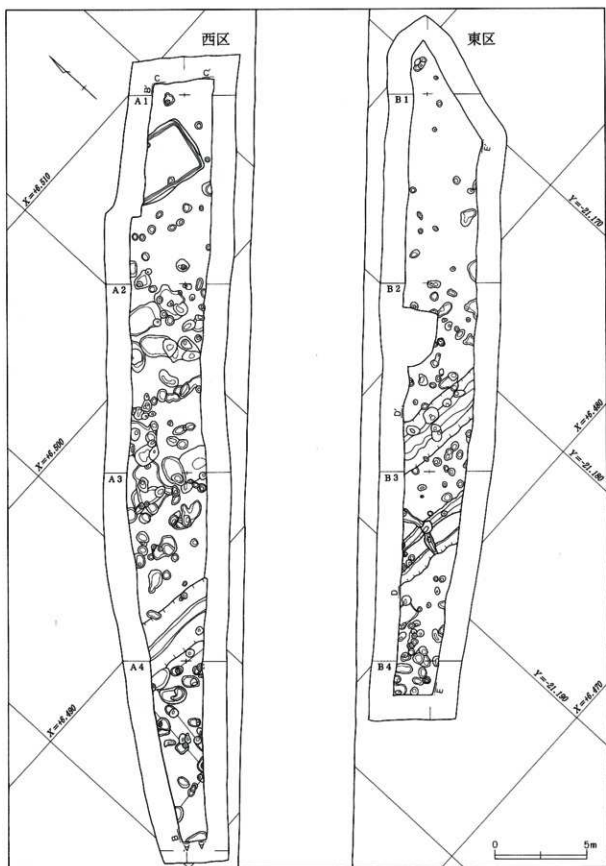
三つめの時期は中世である。中世の遺構・遺物検出面は、第6図トーンで示している第20層の直上である。第20層はシルトの洪水成層である。約15～20cmの堆積を示す。当然のことながら全くの無遺物層である。従って、この第20層が単純な形で挟まる上下層は完全な新旧関係を持つ。先に触れたS J 1出土の丸瓦と第31図の丸瓦は、第20層を挟んで上・下層の関係にある。第20層より下では、中世遺物は検出されない。従って中世城郭としての菖蒲城跡の立地は、遺構・遺物が河成の沖積層上にあり、現況の表層地質と同じく星川自然堤防の後背湿地であった、といえる。

中世の遺物は、質量ともに極めて充実したものとなっているが、遺構との関係を明確にできるものは皆無である。建物などの構造にも関わるであろうが、最も大きな原因は、沖積層内に遺構検出面があり、遺構それ自体が不明瞭だからである。それでも、西区においては小穴ピット群を、東区においては堀状遺構・土塁状遺構を検出することができた。狭小の調査区なが

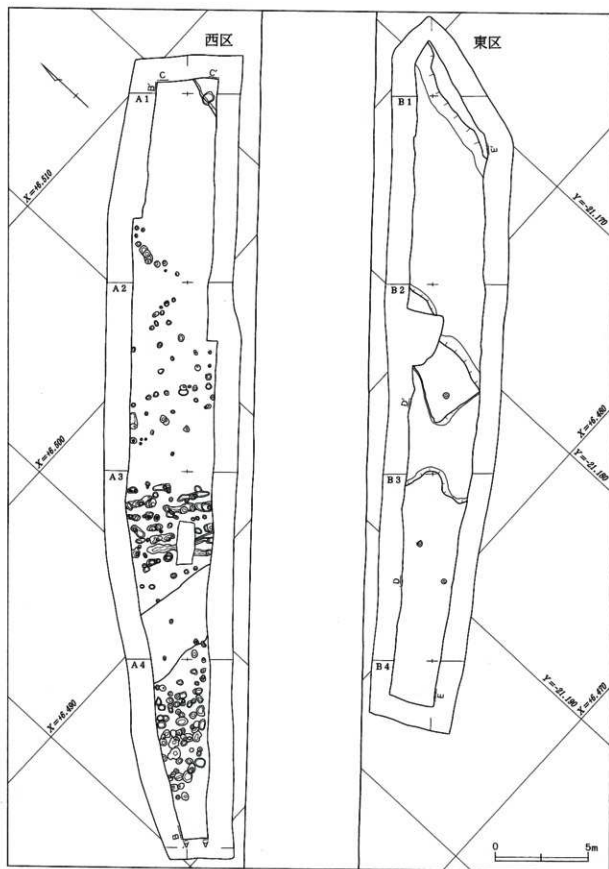
第3圖 葛蒲城跡地形

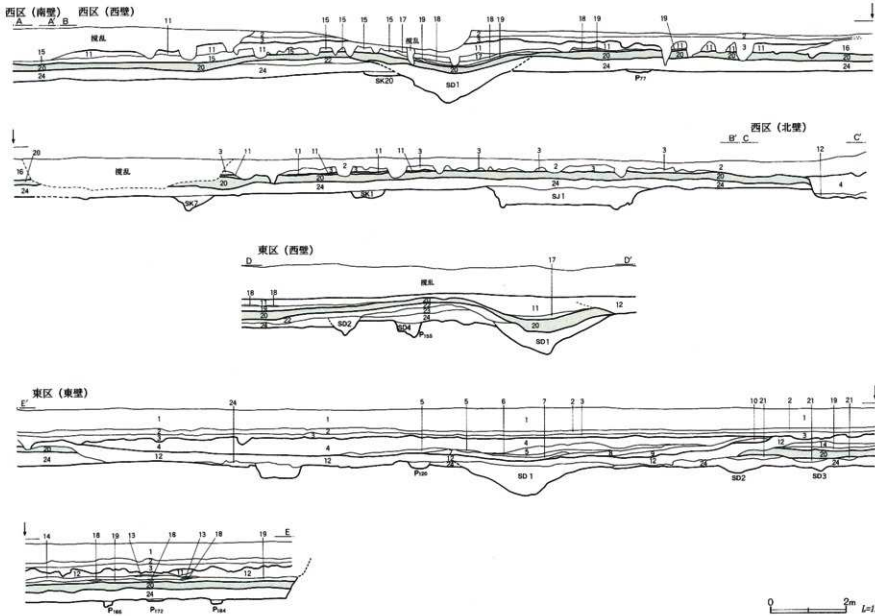


第4图 葛蒲城跡平安時代全測図



第5图 高蒲城跡中世全測図





ら塚状遺構は、西区でも僅かに検出でき、北側に延びることがわかっている。中世ビット群は総計164基である。すべて西区における検出である。位置的な傾向は、平安時代における傾向を極端に強めた形になっている。つまり、西に行くに従い濃密になり、東および南には全くといっていいほど検出されない。西区の北西側にはあやめ田と葛蒲城址之碑あり、地表下に多くの遺構・遺物の存在が予想できる。

遺構の検出状況が不明瞭でありながら、いくつかの重要な事実も明らかにされている。第20層の直上層には薄く広範囲にわたって炭化層が広がっている。建物焼失の可能性がある。一方で土師器皿の被熱発泡した一群が検出され、しかもその一群は、火を受けた後まで、あるいは火を受ける直前まで原形をとどめていた形跡がある。さらに今回の調査によって発見されるまで、そのままの位置を止めていた、などの事実が明らかにされた。それが何を意味するのかは、第5章まとめて詳しく触れることにする。

出土遺物は、発掘面積に比して質的にも高く、量的にも豊富であった。特に中国・龍泉窯系の染付碗・皿、白磁皿、青磁碗・皿などの陶磁器類が、全体に対する

出土比率が高く、特筆される。また、国産陶磁器では瀬戸・美濃の播鉢、灰箱陶器、天目茶碗、香炉、常滑の大甕などが出土した。在地系の土器では、内耳鍋、土師器皿、播鉢などが出土している。他に金属製品として釘、毛抜き、轡、小柄、小札、火打金、弾丸などが、石製品では、硯、石臼類、板碑、砥石があった。出土遺物からは、これまでほとんど知られていなかった葛蒲城跡の姿がわずかながらではあるが、うかがうことができる。

常滑の甕は、14世紀代のものであるが、瀬戸・美濃産の主要な時期は、大窯Ⅰ・Ⅱ期である。

自然化学分析でテフラ分析を行った。詳細は附編Ⅰに載せているので参照されたい。キー層である洪水成層の第20層下より浅間Bテフラ(1108年)が比較的多く検出された。第24層中位あたりに降灰層準があるという。第20層上層では、表土下20cmという浅い地点(第3層)から浅間Aテフラ(1783年)が多く検出された。浅いために耕作による攪乱を受けている可能性があるが、少なくとも第20層下層で検出されることはない。テフラ分析によると、第20層は1108年より新しく、1783年より古いということになる。

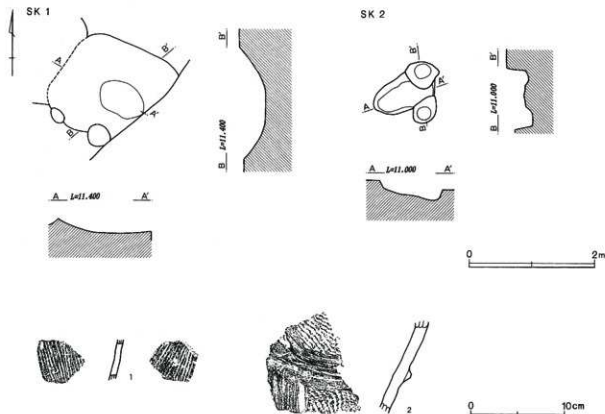
西区・東区土層註記

- 1 赤土
- 2 赤土(褐色上)やや灰褐色灰味で粒子粗しまりなし、塊状作土・あやめ田
- 3 暗褐色土 白色バリエ、炭化物微粒、シルトブロックを混じる。ビニール、しまり粘性やや有り(阻耕作土)
- 4 灰褐色土 炭化物粒、ローム小ブロックを含む。しまり、粘性やや有り。遺物多(中世落込み層上)
- 5 灰白色土 シルトブロックを極めて多く混じる(平面的には土塊状の統がりをもつ)
- 6 4層に近い。
- 7 やや明るく、シルトブロックをわずかに含む。8・4層に近い。
- 8 やや明るく。
- 9 風土粒を多く混じる。
- 10 炭化物を多く混じる。
- 11 炭化物をやや混じる。
- 12 炭化物を多く混じる。
- 13 シルトブロックを多く混じる。
- 14 灰褐色土 12層にほぼ等しいが、炭化物粒多い。遺物多、しまりやや有り、粘性有り(整地層)
- 15 赤褐色土炭化物微粒、しまりやや有り。遺物多。(整地層、何かの基礎)
- 16 赤褐色土炭化物微粒、しまりやや有り。遺物多。
- 17 赤褐色土18層に近い黒色土をベースに赤褐色土ブロックがぎっしりとつまっている。粘性有り。遺物多。
- 18 黒色土炭化物を主体とする。遺物多。
- 19 暗赤褐色土暗褐色土をベースに黄褐色土シルトブロックがぎっしりとつまっている。1層との間に薄い炭化物層有。遺物含まず。
- 20 黄褐色土 シルト粒土(薄い炭化物層が多量的に入っている部分有り、特にS D I部分) 遺物含まず。
- 21 20層に近くシルト質だが、やや暗褐色。
- 22 暗褐色土ローム粒を含む。ややシルト質(土盛りか)
- 23 暗褐色土ローム粒と灰褐色土の混合土(土盛りか)
- 24 黒褐色土砂質「タカシコソウ」多し。上3/1ほどがざらざらしている。しまり弱。顔面砂片を含む。

IV. 遺構と遺物

1. 縄文時代

第7図 第1・2号土壌・出土遺物



(1) 土壌

第1号土壌

第1号土壌は、A2グリッド・SD1の北側で検出された。平面形は隅丸方形である。規模は、東が調査区外になり、西側が第14号土壌に切られているが、長軸が検出部分で1.50m、短軸1.50m、深さは0.35mであった。断面形は緩やかな傾斜を持ち、楕円状となっている。底面でのわずかな立ち上がりを見せているが、調査区外において、いまだ規模を拡大する可能性はある。覆土は暗褐色で堅く締まり、平安時代の遺構と区別される。長軸の方位は、N-66°-Wである。

第2号土壌

第2号土壌は、B2グリッドで検出された。平面形はほぼ楕円形で、小型である。規模は長軸1.02m、短軸

0.55m、深さは0.35mであった。長軸の方位は、N-70°-Eである。第1号土壌と同様の覆土を持つ。また、本遺構と切り合いを持つピットを2基検出した。P1は径0.52m、深さは0.35mであった。P2は、径0.40m、深さは0.30mであった。

遺構に伴う遺物ではないが、縄文土器を2点検出した。1は内外面に明瞭な条痕文を持つ、縄文早期の条痕文系土器である。深鉢形土器の胴部である。

2は2Bグリッド出土である。加曾利EⅢ式の深鉢形土器で、口縁部付近の破片である。陸帯により口縁部の楕円区画文を施す。胴部は縦位の沈線による磨消懸垂文を施す。縄文は、単節LRの縄文である。

2. 平安時代

(1) 住居跡

第1号住居跡

第1号住居跡は、A1グリッドから検出された。平面形は長方形であった。長辺は検出部分で3.90m、短辺は2.25m、深さは0.37mであった。

柱穴は2本検出されたが、本住居に伴うものか不明確である。壁溝は明瞭に検出された。溝幅は約0.12mであった。長軸を主軸とすると軸方向はN-75°-Wである。

出土遺物には、須器器坏が2点、長頸壺1点、丸瓦の破片が1点である。1は口縁部の小破片であるが、ロクロ成形痕が明瞭である。2は完形である。底部に糸切り痕を残す。3は長頸壺で頸部を欠くが、他に欠損部はない。内外面ともロクロによる調整痕が明瞭である。4は丸瓦である。凸面は縦ナデを施したあと、広端面に沿ってナデ整形している。凹面には明瞭な布目が残されている。

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡は、西区A4グリッドのSD1南側から近接して、ほぼ軸線が揃うかたちで検出された。SJ1とは20m以上隔たっている。

細長い発掘区の中でも、最も狭くなる部分であるので検出状況は悪い。南北方向に2間、東西には上記のような制約で1間の検出にとどまった。

柱穴の間隔は、P1-P2間で1.55m、P2-P3では1.73m、P3-P4では1.95mで、ややばらつきがある。ただし、梁行・桁行の違いがあり、P1-P2間を除けば、それほどの偏差ではない。

また、柱穴のそれぞれの径と深さは、P1で径0.62m、深さは0.22m、P2は径0.43m、深さは0.15m、P3は径0.46m、深さは0.66m、P4は径0.58m、深さは0.39mであった。柱穴の深さは、

主軸方向はN-10°-Wである。後述の第2号掘立柱建物跡と極めて隣接し、しかも軸線をはば一にして。出土遺物はない。

第2号掘立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡は、西区A4グリッドのSD1南側、第1号掘立柱建物跡の西側からはば軸線を一にし、極めて近接して検出された。第1号住居跡とは、第1号掘立柱建物跡よりもさらに離れている。

第1号掘立柱建物跡と同様に検出状態は良くないが、辛くも南北方向2間、東西方向2間を検出した。端穴の間隔は、P1-P2間で1.62m、P2-P3間は1.45m、P3-P4間は1.43m、P4-P5間は1.50mであった。第1号掘立柱建物跡に比べると間隔は、はるかに揃っている。径と深さは、P1が径0.92m、深さは0.14m、P2が径0.30m、深さは0.10m。P3が径0.30m、深さは0.35m、P4が径0.31m、深さは0.33m、P5が径0.72m、深さは0.23mであった。主軸方向はN-10°-Wである。出土遺物はない。

(2) 溝跡

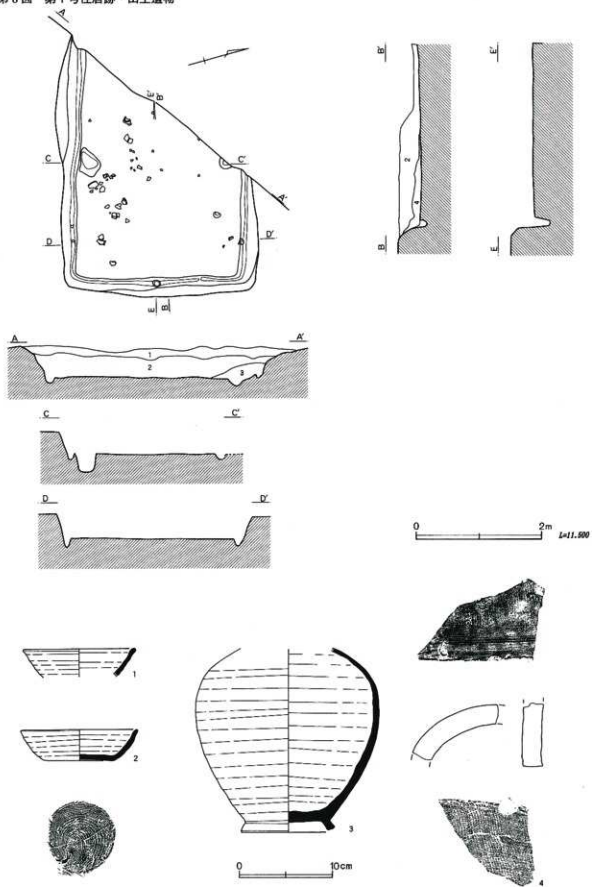
第1号溝跡

第1号溝跡は、東区および西区の両方から検出された。方向、形態、規模からいって同一の溝跡であることは間違いない。西区ではA3・A4グリッドから検出された。断面緩いV字形をとり、底部付近では屈曲した箱葉研風の溝である。幅約2.20m、深さは0.85m、方向はN-87°-Eとなっていて、おおそ東西方向である。

東区ではB2グリッドで検出された。緩いV字形と箱葉研風に変わりはないが、屈曲がやや不明瞭になっている。また、屈曲する位置が若干高くなっている。幅2.15m、深さは0.81m、方向はN-88°-Eであった。

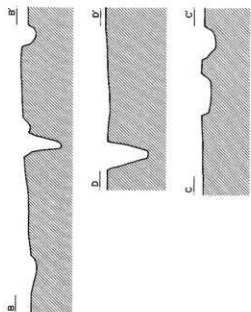
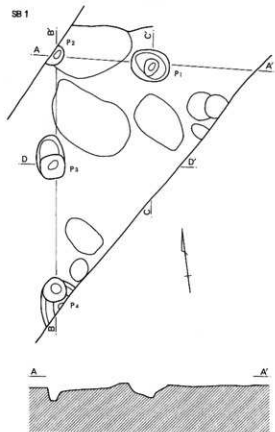
第1号溝跡の掘り込み面であるが、第20層が溝を渡っていることから、それ以下であることは間違いない。第24層と溝覆土は異なっているが、第24層の下層から上層までにおいて、異なりかたが一樣ではなく、立ち上がり不明瞭である。あるいは第24層内のどこかに求められるのかもしれないが、ここでは点線で表示した。

第8図 第1号住居跡・出土遺物

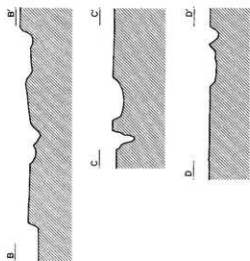
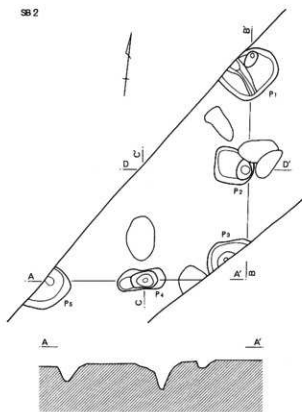


第9图 第1·2号掘立柱建物

SB 1

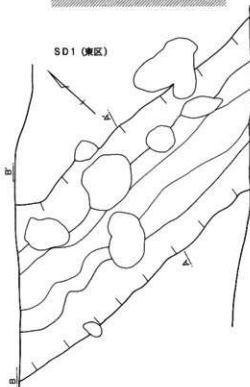
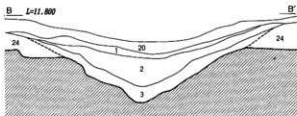
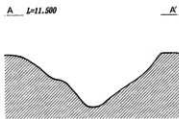
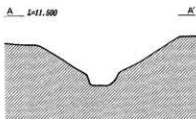


SB 2



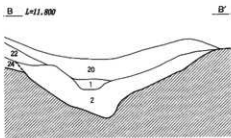
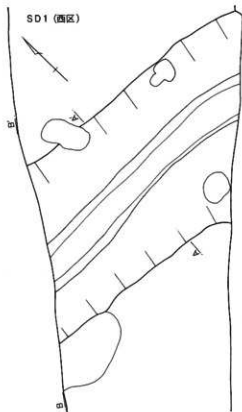
0 2m 1/11.30

第10図 第1号溝跡



SD-1 (西区)

- 20 黄褐色土 シルト～粘土 薄い炭化物の層が多層的に入っている。部分有り (特にSD1部分) 遺物含まず。(洪水による層)
- 24 黒褐色土 砂質「タカシコソウ」多し。上1/3ほどがザラザラしている。しまり面。須恵器片を含む。
- 1 暗黄褐色土 20層に近いがやや暗い 須恵器片と瓦を含む
- 2 黒褐色土 24層に近いが黄褐色シルトブロックがやや混じる。須恵器片を含む
- 3 黒褐色土 砂質「タカシコソウ」多し。上1/3ほどがザラザラしている。しまり面 須恵器片を含む

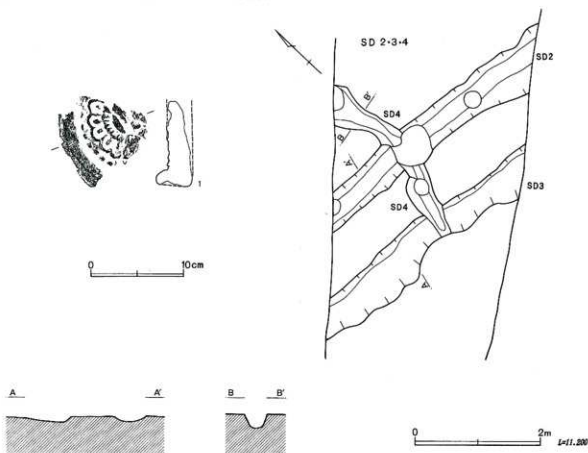


SD-1 (東区)

- 20 黄褐色土 シルト～粘土 薄い炭化物の層が多層的に入っている。部分有り (特にSD1部分) 遺物含まず。(洪水による層)
- 22 暗黄褐色土 ローム粒を含む。ややシルト質
- 24 黒褐色土 砂質「タカシコソウ」多し。上1/3ほどがザラザラしている。しまり面。須恵器片を含む。
- 1 シルト質だが、やや暗褐色。
- 2 黒褐色土 24層に近いが黄褐色シルトブロックがやや混じる。須恵器片を含む



第11図 第1号溝跡出土遺物・第2・3・4号溝跡



出土遺物には軒丸瓦が1点ある。複弁8弁蓮華文である。瓦当面の約1/4の残存である。全体に摩滅が激しく良い状態ではない。特に瓦当部側面および裏面は剥離している上に摩滅が激しい。推定直径約15cm、瓦当面の厚さは2.6cmほどと思われる。酸化炎焼成されやや軟質、表面は黒灰色、内部は淡褐色である。胎土は砂粒、赤色粒を含む。

中房は縁辺の一部を残すのみで大半を欠失している。高さは約2mmである。中房の外側には1cmほどの幅で蕊が廻る。蕊は弁より一段高く表現される。弁は凸線で表現され、子葉とともに丸味を帯びている。子葉の長さは1cm、中房から弁端までは約2.7cmである。弁の外側には殊文が配される。周縁は高さ約1cmで、短く直立した後斜縁となるが、端面は平縁である。これは斜縁部分を端面中ほどから篋状工具によって切り落としているためである。拓本では表われていないが、

殊文の外側に篋状工具による細い沈線が見られる。殊文は沈線によって切られており、この沈線は、斜縁部分の延長上にあたることから、斜縁部分は後から切り落とされていることが窺える。

(3) 土壇

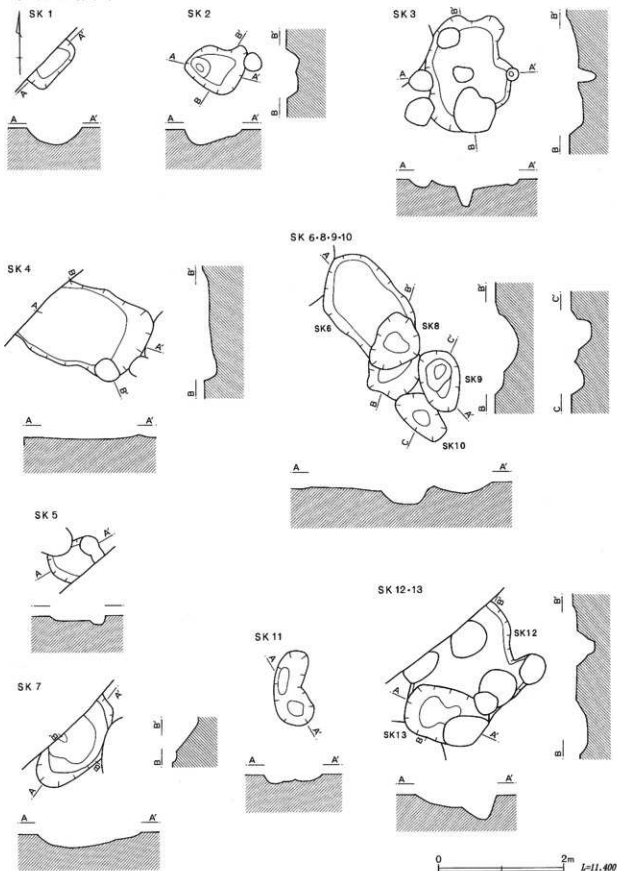
第1号土壇

第1号土壇は、A1グリッドで検出された。平面形は小形の隅丸方形である。半分は調査区外で未検出である。したがって、規模は短軸方向で未確定である。長軸は0.90m、短軸が検出部分で0.32m、深さは0.25mであった。長軸の方位は、N-48°-Eである。遺物はない。

第2号土壇

第2号土壇は、A2グリッドで検出された。平面形は不整形な円形である。規模は長軸0.93m、短軸0.70m、深さは0.24mであった。長軸の方位は、N-76°

第12図 土壌 (1)



-Wである。

第3号土壌

第3号土壌は、A2グリッドで検出された。平面形は、不整形な円形である。規模は長軸が1.60m、短軸が1.30m、検出面からの深さは0.18mであった。複数のピットと切り合いを持ち、近接の第4号土壌がわずかに本土壌をきっている。B-B'方向を軸とするとN-7°-Wとなる。

第4号土壌

第4号土壌は、A2グリッドで検出された。平面形は、隅丸長方形である。規模は長軸方向が調査区外に出るため未確定である。検出部分で1.85m、短軸1.28m、深さは0.07mであった。長軸の方位はN-71°-Wである。

第5号土壌

第5号土壌は、A2グリッドで検出された。平面形は、ほぼ不整形な円形と思われる。規模は0.88m×0.55mほどだが一部は調査区外に出る。深さは0.08mであった。A-A'方向でN-60°-Eである。

第6号土壌

第6号土壌は、A2グリッドで検出された。平面形は、楕円形である。第8号土壌と切り合い関係を持つ。規模は長軸が復原長1.88m、短軸1.13m、深さは0.14mであった。長軸の方位は、N-42°-Wである。

第7号土壌

第7号土壌は、A2グリッドで検出された。平面形は、楕円形である。規模は、長軸1.68m、短軸が検出部分で0.71m、深さは0.41mであった。長軸の方位は、N-30°-Eである。

第8号土壌

第8号土壌は、A2グリッドで検出された。平面形は、不整形な円形である。南側で浅い段を持ち、二つの土壌が複合したような形態をしている。規模は長軸0.92m、短軸0.72m、深さは0.32mであった。長軸の方位は、N-23°-Eである。

第9号土壌

第9号土壌は、A2グリッドで検出された。平面形

は、楕円形である。規模は長軸0.98m、短軸0.65m、深さは0.33mであった。長軸の方位は、N-10°-Wである。

第10号土壌

第10号土壌は、A2グリッドで検出された。平面形は、小形の楕円形である。規模は長軸0.92m、短軸が0.50m、深さは0.21mであった。長軸の方位は、N-48°-Wである。わずかではあるが、第8号土壌を切り、第9号土壌に切られている。

第11号土壌

第11号土壌は、A2グリッドで検出された。平面形は、二つを合わせたような瓢箪形をしている。規模は長軸0.93m、短軸0.53m、深さは0.14mであった。長軸の方位は、N-32°-Wである。

第12号土壌

第12号土壌は、A2グリッドで検出された。平面形は、極めて不整形な形をしている。いくつか複合した可能性がある。規模は2.38m×1.40mほどで極めて浅い。

第13号土壌

第13号土壌は、A2グリッドで検出された。平面形は、隅丸長方形である。規模は長軸1.30m、短軸0.88m、深さは0.22mであった。長軸の方位は、N-65°-Wである。

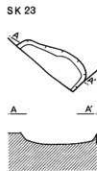
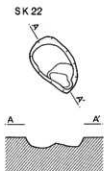
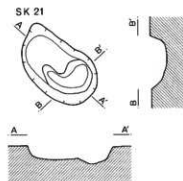
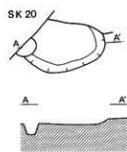
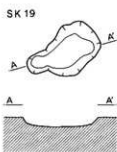
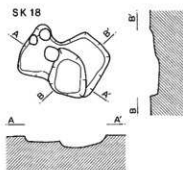
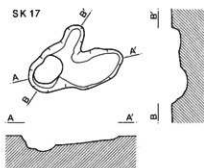
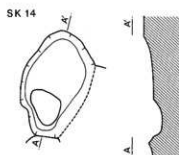
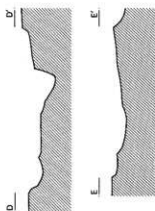
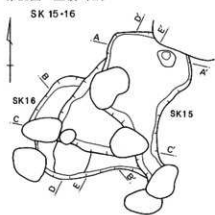
第14号土壌

第14号土壌は、A3グリッドで検出された。平面形は、不整形な円形である。規模は長軸1.70m、短軸が推定で1.10m、深さは0.10mであった。長軸の方位は、N-14°-Eである。

第15・16号土壌

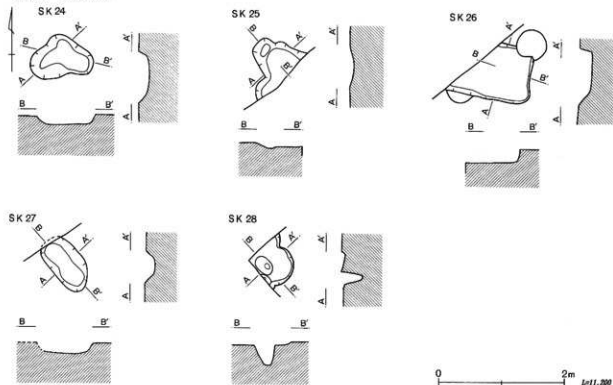
第15・16号土壌は、A3グリッドで検出された。平面形は、複合的に切りあっていて、極めて不整形である。15号の規模は2.52m×1.30m程度、深さは0.10m程度であった。16号の規模は、1.68m×0.74m、深さは0.19mであった。

第13図 土壇 (2)



0 ————— 2m L=11,400

第14図 土壌 (3)



第17号土壌

第17号土壌は、A 3 グリッドで検出された。平面形は、長円形の複合した形になっている。規模は長軸1.56m、短軸0.76m、深さは0.10mであった。

第18号土壌

第18号土壌は、A 3 グリッドで検出された。平面形は、方形を組み合わせたような形をしている。規模は長軸1.32m、短軸1.03m、深さは0.15mであった。長軸の方位は、N-56°-Wである。

第19号土壌

第19号土壌は、A 3 グリッドで検出された。平面形は、不整形な円形である。規模は長軸1.22m、短軸0.78m、深さは0.15mであった。長軸の方位は、N-75°-Eである。

第20号土壌

第20号土壌は、A 4 グリッドで検出された。平面形は、西を調査区に北をSD 1に切られているが楕円形と考えられる。規模は検出部分で1.38m×0.80m、深さは0.12mであった。

第21号土壌

第21号土壌は、A 4 グリッドで検出された。平面形は、ほぼ楕円形である。南の部分に一段下げた浅い掘り込みがある。規模は長軸1.40m×短軸0.82m、深さは0.21mであった。長軸の方位は、N-47°-Wである。

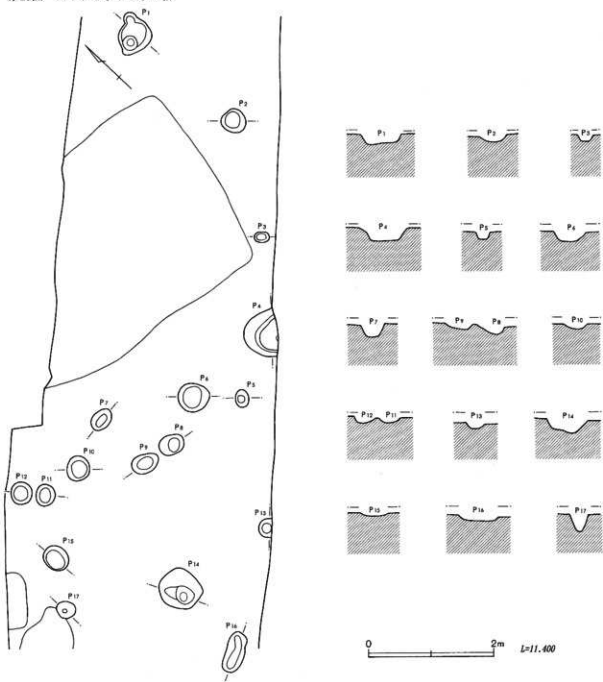
第22号土壌

第22号土壌は、A 4 グリッドで検出された。平面形は、小形の楕円形である。規模は長軸0.94m、短軸0.59m、深さは0.11mであった。長軸の方位は、N-32°-Wである。

第23号土壌

第23号土壌は、A 4 グリッドで検出された。半分以上が調査区外に出るが、隅丸長方形と考えられる。規模は検出部分で1.20m×0.43m、深さは0.19mであった。長軸の方位は、N-58°-Wである。

第15図 A1グリッドピット群



第24号土壌

第24号土壌は、B1グリッドで検出された。

平面形は、不整形な円形である。規模は0.93m × 0.62m、深さは0.24mであった。

第25号土壌

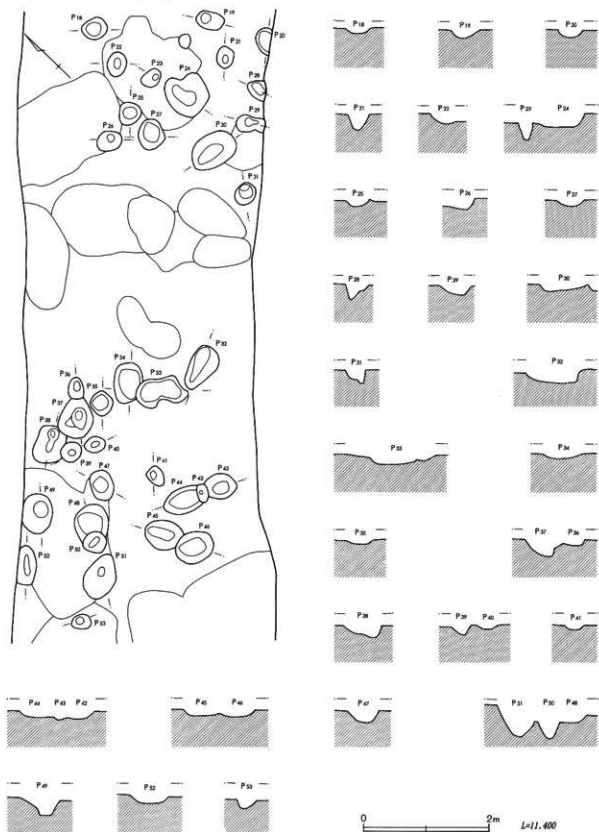
第25号土壌は、B2グリッドで検出された。平面形

は、南側が調査区外で切られ全容は不明である。不整形な円形と考えられる。規模は、検出部分で0.70m × 0.60m、深さは0.10mであった。

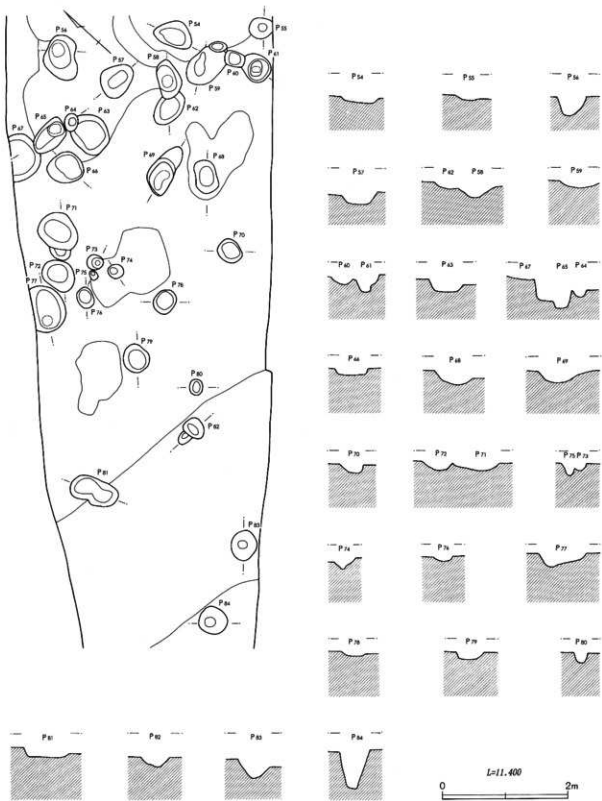
第26号土壌

第26号土壌は、B3グリッドで検出された。平面形は端正な方形であるが、西側を調査区外で切られる。

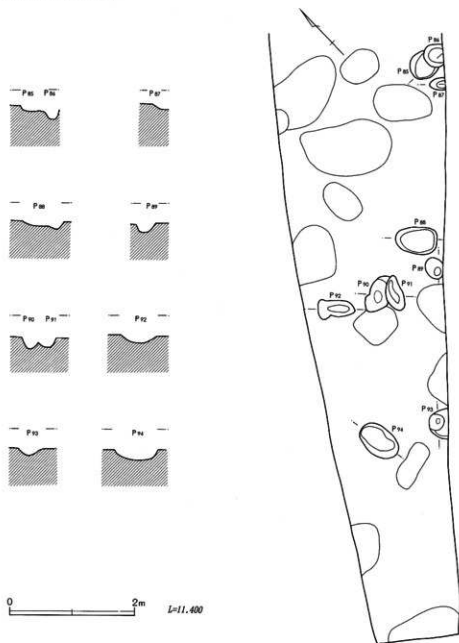
第16図 A2グリッドビット群



第17図 A3グリッドピット群



第18図 A4グリッドピット群



規模は長軸方向検出部分で0.84m、短軸0.90m、深さは0.22mで、他に比してしっかりしている。長軸の方位は、 $N-73^{\circ}-W$ である。

第27号土坑

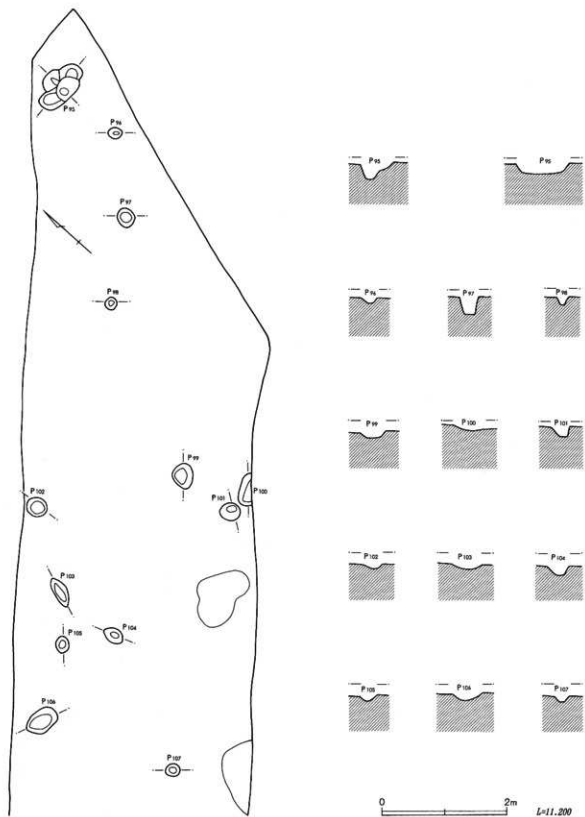
第27号土坑は、B4グリッドで検出された。平面形は、小形の楕円形である。規模は長軸が推定で0.93m、

短軸0.50m、深さは0.17mであった。長軸の方位は、 $N-43^{\circ}-W$ である。

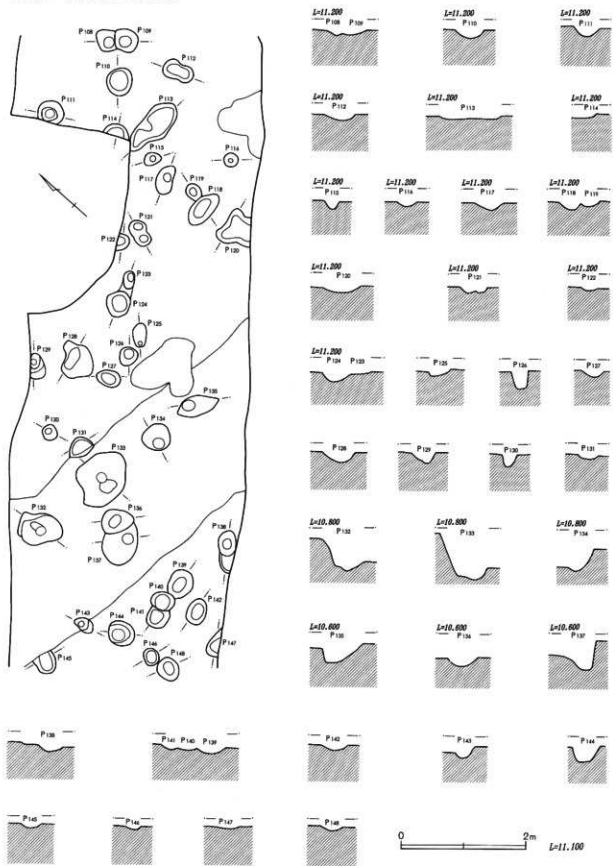
第28号土坑

第28号土坑は、B4グリッドで検出された。平面形は、調査区外に切られ全容は不明。規模は検出部分で0.58m×0.64m、深さは0.07mであった。

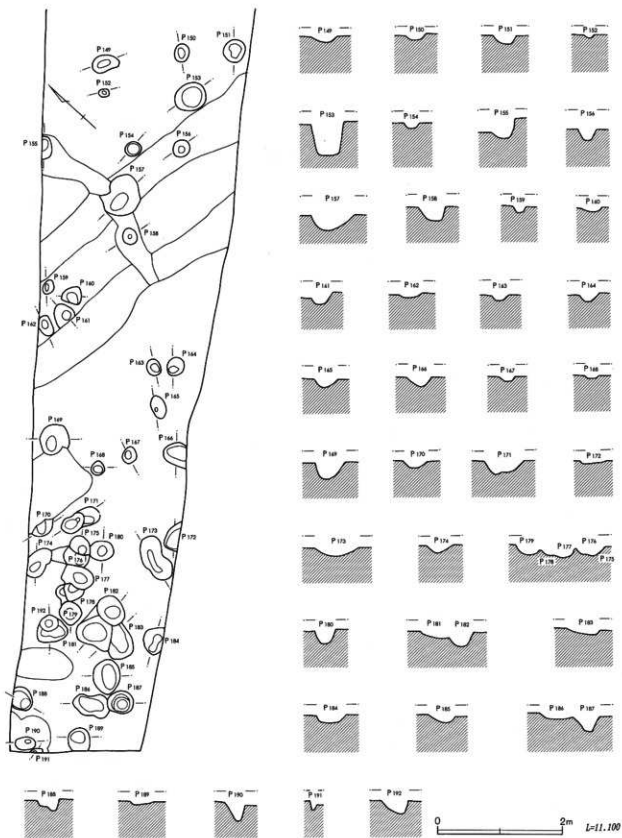
第19図 B1 グリッドピット群



第20図 B2グリッドビット群



第21図 B3・B4グリッドビット群



(4) 小穴

平安時代の小穴ビット群は、後述の中世小穴ビット群に比べて、検出の状況はまだ良好であった。相対的にはあるが、全体としては中世よりもやや大きめで深さも深い。総計数は201基である。東西区の内訳は、西区で94基、東区で98基であった。

検出の傾向は、北東側、B1グリッドがもっとも希

平安時代ビット群観察表(1)

番号	グリッド	径	深さ
1	A1グリッド	68.0	13.0
2	A1グリッド	42.0	13.0
3	A1グリッド	24.0	10.0
4	A1グリッド	78.0	25.0
5	A1グリッド	22.0	11.0
6	A1グリッド	52.0	16.0
7	A1グリッド	39.0	11.0
8	A1グリッド	42.0	17.0
9	A1グリッド	46.0	11.0
10	A1グリッド	48.0	8.0
11	A1グリッド	32.0	7.0
12	A1グリッド	36.0	12.0
13	A1グリッド	31.0	13.0
14	A1グリッド	68.0	34.0
15	A1グリッド	44.0	7.0
16	A1グリッド	63.0	9.0
17	A1グリッド	30.0	29.0
18	A2グリッド	40.0	10.0
19	A2グリッド	46.0	13.0
20	A2グリッド	40.0	14.0
21	A2グリッド	35.0	27.0
22	A2グリッド	39.0	7.0
23	A2グリッド	23.0	31.0
24	A2グリッド	73.0	21.0
25	A2グリッド	45.0	11.0
26	A2グリッド	39.0	19.0
27	A2グリッド	44.0	11.0
28	A2グリッド	36.0	24.0
29	A2グリッド	49.0	13.0
30	A2グリッド	78.0	11.0
31	A2グリッド	32.0	22.0
32	A2グリッド	10.5	13.0
33	A2グリッド	44.0	14.0
34	A2グリッド	64.0	12.0
35	A2グリッド	42.0	12.0
36	A2グリッド	34.0	10.0
37	A2グリッド	47.0	26.0
38	A2グリッド	61.0	19.0
39	A2グリッド	33.0	16.0
40	A2グリッド	35.0	10.0
41	A2グリッド	30.0	8.0
42	A2グリッド	45.0	10.0
43	A2グリッド	19.0	15.0

薄で、西に向って多くなる傾向がある。南西の一番端(4グリッド)で、2棟の掘立柱建物を検出している。中世小穴ビット群でも触れているが、西に行くにしたがって多くなるのは、遺跡の本体が西側にあることを予想させる。

番号	グリッド	径	深さ
44	A2グリッド	54.0	9.0
45	A2グリッド	59.0	9.0
46	A2グリッド	56.0	11.0
47	A2グリッド	51.0	17.0
48	A2グリッド	45.0	10.0
49	A2グリッド	64.0	27.0
50	A2グリッド	34.0	19.0
51	A2グリッド	58.0	40.0
52	A2グリッド	65.0	18.0
53	A2グリッド	30.0	13.0
54	A3グリッド	61.0	13.0
55	A3グリッド	36.0	8.0
56	A3グリッド	47.0	35.0
57	A3グリッド	61.0	29.0
58	A3グリッド	62.0	25.0
59	A3グリッド	61.0	17.0
60	A3グリッド	34.0	16.0
61	A3グリッド	34.0	30.0
62	A3グリッド	38.0	13.0
63	A3グリッド	56.0	20.0
64	A3グリッド	24.0	12.0
65	A3グリッド	62.0	37.0
66	A3グリッド	54.0	12.0
67	A3グリッド	47.0	13.0
68	A3グリッド	60.0	11.0
69	A3グリッド	89.0	18.0
70	A3グリッド	40.0	15.0
71	A3グリッド	73.0	17.0
72	A3グリッド	52.0	16.0
73	A3グリッド	20.0	6.0
74	A3グリッド	33.0	12.0
75	A3グリッド	21.0	13.0
76	A3グリッド	31.0	11.0
77	A3グリッド	78.0	21.0
78	A3グリッド	37.0	9.0
79	A3グリッド	45.0	12.0
80	A3グリッド	23.0	14.0
81	A3グリッド	73.0	17.0
82	A3グリッド	47.0	29.0
83	A3グリッド	50.0	32.0
84	A3グリッド	48.0	61.0
85	A4グリッド	30.0	11.0
86	A4グリッド	23.0	24.0

平安時代ビット群観察表(2)

番号	グリッド	径	深さ
87	A4グリッド	26.0	9.0
88	A4グリッド	66.0	13.0
89	A4グリッド	32.0	15.0
90	A4グリッド	34.0	19.0
91	A4グリッド	30.0	15.0
92	A4グリッド	57.0	12.0
93	A4グリッド	41.0	11.0
94	A4グリッド	7.0	18.0
95	B1グリッド	86.0	28.0
96	B1グリッド	23.0	7.0
97	B1グリッド	30.0	29.0
98	B1グリッド	20.0	12.0
99	B1グリッド	40.0	13.0
100	B1グリッド	50.0	10.0
101	B1グリッド	30.0	16.0
102	B1グリッド	33.0	9.0
103	B1グリッド	50.0	6.0
104	B1グリッド	33.0	15.0
105	B1グリッド	26.0	8.0
106	B1グリッド	53.0	14.0
107	B1グリッド	23.0	9.0
108	B2グリッド	24.0	11.0
109	B2グリッド	37.0	8.0
110	B2グリッド	45.0	14.0
111	B2グリッド	41.0	9.0
112	B2グリッド	50.0	10.0
113	B2グリッド	100.0	7.0
114	B2グリッド	20.0	7.0
115	B2グリッド	23.0	14.0
116	B2グリッド	30.0	7.0
117	B2グリッド	49.0	17.0
118	B2グリッド	35.0	12.0
119	B2グリッド	27.0	7.0
120	B2グリッド	60.0	11.0
121	B2グリッド	43.0	11.0
122	B2グリッド	25.0	6.0
123	B2グリッド	33.0	5.0
124	B2グリッド	43.0	16.0
125	B2グリッド	36.0	6.0
126	B2グリッド	28.0	28.0
127	B2グリッド	39.0	9.0
128	B2グリッド	51.0	17.0
129	B2グリッド	40.0	17.0
130	B2グリッド	24.0	21.0
131	B2グリッド	32.0	8.0
132	B2グリッド	68.0	10.0
133	B2グリッド	76.0	75.0
134	B2グリッド	41.0	35.0
135	B2グリッド	66.0	40.0
136	B2グリッド	50.0	14.0
137	B2グリッド	58.0	54.0
138	B2グリッド	65.0	16.0
139	B2グリッド	45.0	16.0

番号	グリッド	径	深さ
140	B2グリッド	28.0	9.0
141	B2グリッド	31.0	10.0
142	B2グリッド	42.0	10.0
143	B2グリッド	31.0	18.0
144	B2グリッド	44.0	26.0
145	B2グリッド	32.0	9.0
146	B2グリッド	24.0	7.0
147	B2グリッド	41.0	5.0
148	B2グリッド	34.0	6.0
149	B3グリッド	41.0	11.0
150	B3グリッド	29.0	7.0
151	B3グリッド	36.0	11.0
152	B3グリッド	17.0	6.0
153	B3グリッド	54.0	57.0
154	B3グリッド	25.0	8.0
155	B3グリッド	40.0	31.0
156	B3グリッド	30.0	18.0
157	B3グリッド	68.0	31.0
158	B3グリッド	42.0	22.0
159	B3グリッド	19.0	19.0
160	B3グリッド	32.0	8.0
161	B3グリッド	32.0	17.0
162	B3グリッド	40.0	6.0
163	B3グリッド	27.0	8.0
164	B3グリッド	30.0	13.0
165	B3グリッド	36.0	12.0
166	B3グリッド	38.0	16.0
167	B3グリッド	23.0	6.0
168	B3グリッド	22.0	6.0
169	B3グリッド	48.0	26.0
170	B3グリッド	38.0	13.0
171	B3グリッド	63.0	23.0
172	B3グリッド	42.0	5.0
173	B3グリッド	72.0	15.0
174	B3グリッド	41.0	11.0
175	B3グリッド	28.0	20.0
176	B3グリッド	18.0	14.0
177	B3グリッド	35.0	17.0
178	B3グリッド	20.0	15.0
179	B3グリッド	37.0	14.0
180	B3グリッド	31.0	19.0
181	B3グリッド	48.0	10.0
182	B3グリッド	38.0	22.0
183	B4グリッド	55.0	11.0
184	B4グリッド	48.0	13.0
185	B4グリッド	42.0	12.0
186	B4グリッド	53.0	8.0
187	B4グリッド	44.0	24.0
188	B4グリッド	36.0	19.0
189	B4グリッド	35.0	8.0
190	B4グリッド	32.0	31.0
191	B4グリッド	10.0	19.0
192	B4グリッド	42.0	21.0

3. 中世

(1) 遺構

a. 堀状遺構

堀状遺構は、西区・東区の両者から検出されている。西区ではA1グリッドから、東区ではB1～2グリッドから検出された。西区での検出は極めて部分的であるが、第1号溝跡の例と同様に渠道地下を通して破線のようにつながっていることは間違いない。さらに北に延びている。東区では、対岸の立ち上がりを検出することができた。

堀幅は8.3mである。深さは堀幅に比べてそれほどでもなく、0.35m程度である。東区B2グリッド(ポイントB)側の上場標高が11.37m、下場が11.05mであり、比高差0.32mとなる。B1グリッド(ポイントB')側では、上場11.58m、下場11.24mで、比高差は0.34mである。比高差はそれほど変わらないが、前者は比較的明確に落ち込んでいるが、後者はなだらかである。中央部の最も深い部分で11.00m前後である。西区では上場11.58m、下場11.45m、比高差0.13mである。

遺物は、土器器皿が6点出土した。やや浮いた状態でもあり(第25図)、本遺構に伴うものか明確にできない。1は、内底面と口辺部との境を、ロクロで押し込むように整形し、明瞭にさせている。底部が大きく、口辺が外反しながら素直に開いていく。このタイプには、色調が薄い白身がかった褐色のものが多く、さらに胎土がざらつくことが多い。また、せいぜい1/3から2/3程度の復原が多く、完全に形になるものが少ないというのも特徴である。

2も1と同じ、底部が大きく、口辺が外反しながら素直に開いていくタイプである。同じように色調が薄い褐色である。3は、それほどはっきりはしないものの、やはり内底面と口辺部との境を、押し込む明瞭にさせようとする意識が見える。底部糸きり痕を残す。明赤褐色で、非常に焼き締まっている。このタイプは全体から見てもそう類例はない。形になるものでは、この3と4だけである。底部が大きく、口辺が外反し

ながら素直に開いていくタイプ。しかし、このタイプに特徴的な色調ではなく、対照的な明赤褐色でやはり、非常に焼き締まっている。

4も底部が大きく、口辺が外反しながら素直に開くタイプで、3と極めて類似している。特徴はほとんど同じである。3とともに土器のこの土器は胎土分析に出している。附編2を参照されたい。5の成形方法は、ロクロによる引上げの技法によっている。しかも、内面にロクロ痕を明瞭に残し、さらにその後、内底面を指による3～4条の押し込みのような成形を行う。他にも多数類例があり、極めて特徴的な技法である。6は、底部が大きく、口辺が外反しながら素直に開くタイプである。内面のロクロ引上げ痕は、それほどはっきりはしないものの、内底面に指による3～4条の押し込み痕が明瞭にある。

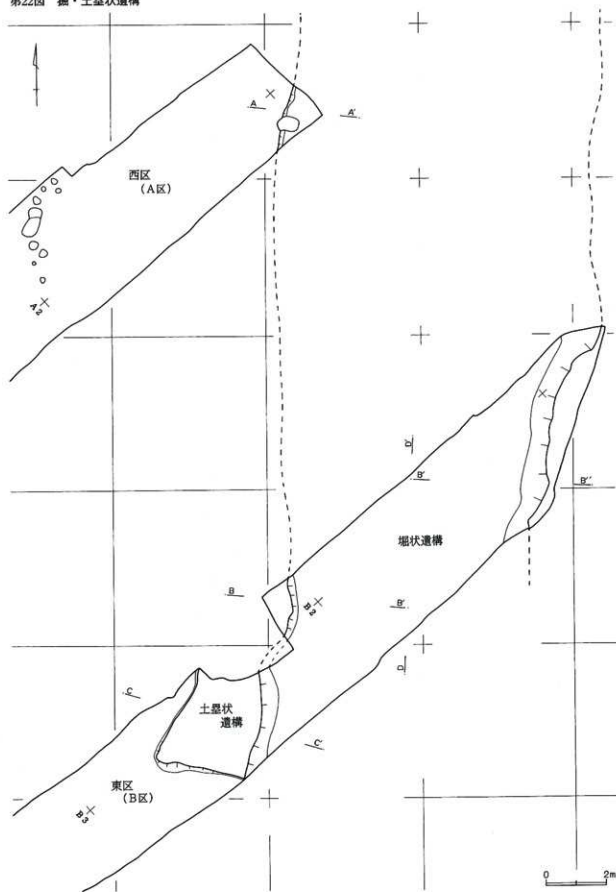
b. 土壘状遺構

土壘状遺構は、東区堀状遺構に隣接して、B2グリッドから検出された。検出部分での形状は、南側でやや開く台形である。先端部の幅は、上場間2.90m、中央部(C-C')付近で下場間3.20m、上場間2.75mである。北側の調査区に切られてしまう部分で上場間2.80m、下場間2.10mである。検出部分での長さは、下場からの距離で3.05m、上場からは2.90mであった。

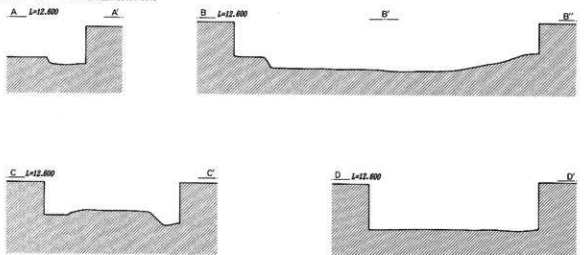
高さは、西側ではほとんど差がない。西側(ポイントC側)の下場は標高11.45m、上場は11.52m、比高差0.07mである。土壘としての地彫れもほとんどなく、中央付近の標高11.58mでありわずかに盛り上がるに過ぎない。西側下場からの比高差0.13mである。東側では、堀状遺構の落ち込みがあり、40cm近くの高差がある。東側(ポイントC'側)の下場は11.14m、上場は11.52mで、差し引き0.38mとなる。

このように城跡に関わると考えられる遺構は、検出の状況が悪く、縄張りと考えられる材料にはならない。堀状遺構の幅などは掘としての機能を十分考えられるものの、検出面からの高さではあるが、掘り込みが浅

第22図 掘・土塁状遺構



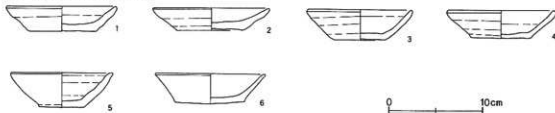
第23図 掘・土塁状遺構断面図



く明瞭でない。ただし、堀状遺構は洪水成層である第20層を掘りぬき、また方向が南北にはぼ崩っており、人為的な構築物であることは間違いない。あるいは、本来はもっと高い位置からの掘り込みであったかもしれない。同様に土塁状遺構も、わずかな高まりに過ぎず、土塁としての機能をうかがうことはできない。堀状遺構と同じように何らかの理由で削平を受けているかもしれない。

以上のように葛蒲成跡の構造を明確にできるような遺構は、検出することはできなかった。しかし、今後の周辺の発掘調査では、十分に子察を与えるもの考える。

第24図 西区堀状遺構出土遺物



西区堀状遺構出土遺物観察表

番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器	皿	(11.8)	2.6	6.9	A	H, E	鈍い橙	85	西区堀状遺構	
2	土師器	皿	(12.4)	2.3	(6.7)	A	C	鈍い橙	30	西区堀状遺構	
3	土師器	皿	11.2	3.15	5.35	A	A	明赤褐	45	西区堀状遺構	
4	土師器	皿	(11.6)	2.95	6.05	A	A	明赤褐	50	西区堀状遺構	
5	土師器	皿	(10.9)	3.6	4.7	A	E, H	浅黄橙	60	西区堀状遺構	底部未切り
6	土師器	皿	(11.7)	3.2	7.4	A	A	鈍い橙	70	西区堀状遺構	

c. 小穴ピット群

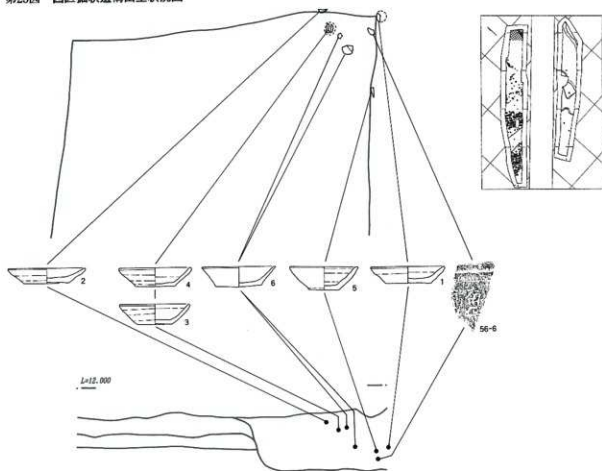
中世のピットは、沖積層面からの掘り込みということがあって、非常に不明瞭である。また、小さく深さも浅い。総計数は、164基である。東区には検出されず、すべて西区における検出である。

A1グリッドでは、西区扇状遺構と切り合いをもつて1基発見されているが、その他は南側に片寄り、また数も少ない。A1グリッドには、ピットだけでなく他の遺構も検出されていない。北側に向って遺構が希薄になる傾向を示している。

A2グリッドはA1に比べてやや数を増やすものの

拡散的で、不規則な配置である。建物の配置を想定することはできない。A3グリッドは、さらに数を増やし深めのもも検出されている。やはり遺構の性格を特定することはできない。A4グリッドは最も集中する部分である。傾向は、北から南にかけて徐々に増えていくようだが、A4グリッドのさらに南は切れてしまうようである。むしろ西方向に集中の傾向があると考えられる。調査区のさらに西側にはあやめ田と菖蒲城址之碑があり、城の主要部があると予想される。

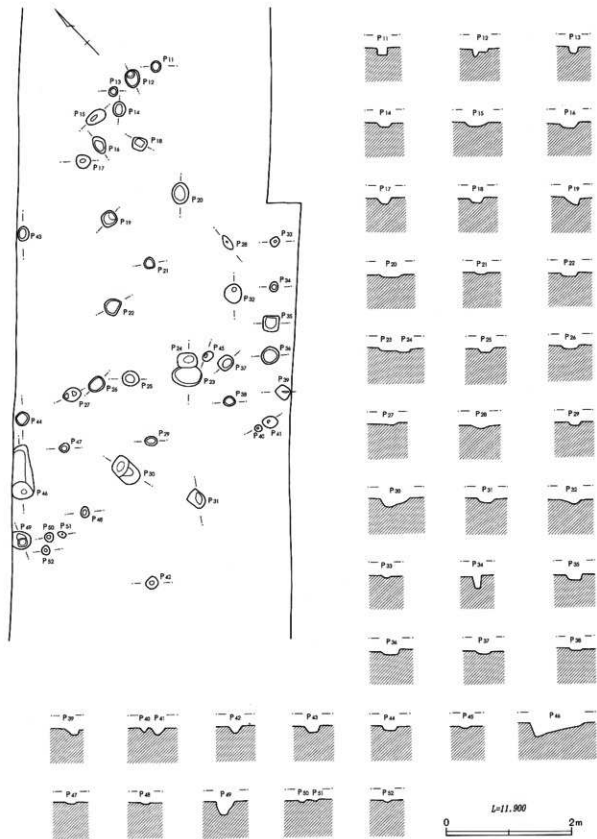
第25図 西区扇状遺構出土状況図



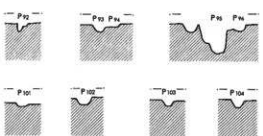
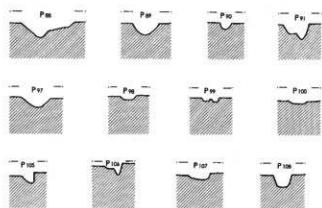
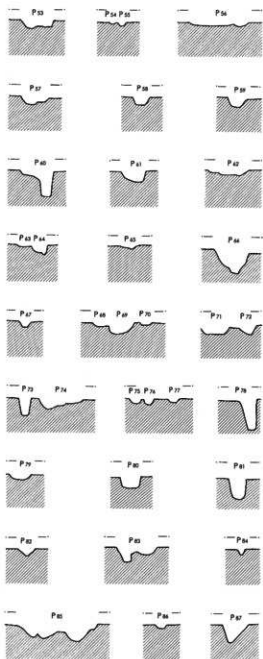
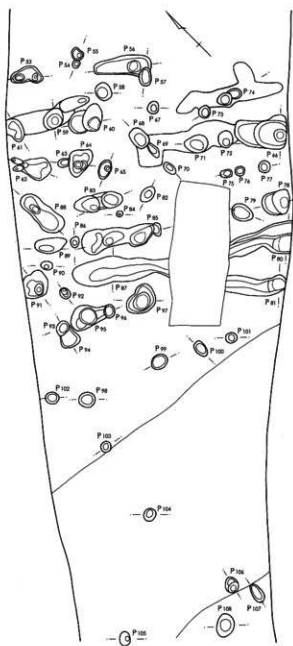
第26図 A1グリッドピット群



第27図 A 2 グリッドビット群

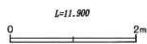
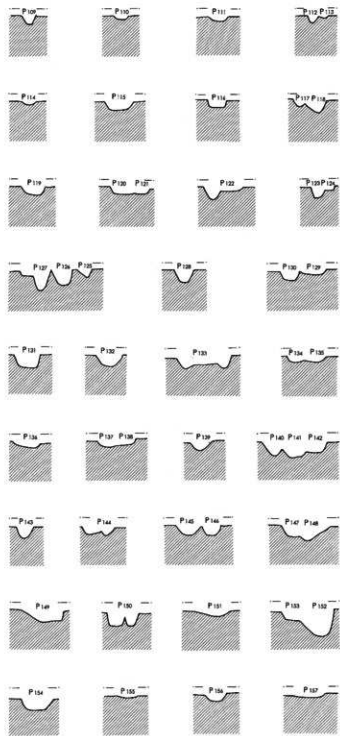
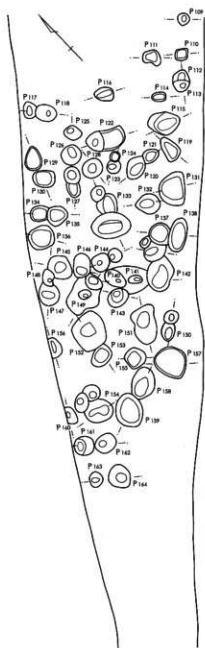


第28図 A3グリッドピット群



0 2m L=1:1,000

第29図 A4 グリッドピット群



中世ビット群観察表(1)

番号	グリッド	径	深さ
1	A1グリッド	45.0	24.0
2	A1グリッド	21.0	6.8
3	A1グリッド	18.0	29.2
4	A1グリッド	16.0	4.7
5	A1グリッド	30.0	33.0
6	A1グリッド	24.63	18.0
7	A1グリッド	28.0	24.1
8	A1グリッド	27.0	18.9
9	A1グリッド	16.0	13.2
10	A1グリッド	20.0	14.2
11	A2グリッド	16.0	13.0
12	A2グリッド	26.0	12.7
13	A2グリッド	14.0	8.2
14	A2グリッド	24.0	7.0
15	A2グリッド	36.0	7.0
16	A2グリッド	30.0	10.6
17	A2グリッド	22.0	10.9
18	A2グリッド	22.0	7.5
19	A2グリッド	24.0	12.7
20	A2グリッド	34.0	5.6
21	A2グリッド	16.0	2.0
22	A2グリッド	28.0	6.0
23	A2グリッド	28.0	5.0
24	A2グリッド	24.0	5.8
25	A2グリッド	26.0	8.3
26	A2グリッド	28.0	5.6
27	A2グリッド	28.0	6.5
28	A2グリッド	20.0	
29	A2グリッド	21.0	5.7
30	A2グリッド	50.0	14.1
31	A2グリッド	28.0	7.6
32	A2グリッド	31.0	8.3
33	A2グリッド	16.0	5.7
34	A2グリッド	14.0	19.5
35	A2グリッド	24.0	11.4
36	A2グリッド	30.0	7.7
37	A2グリッド	25.0	6.3
38	A2グリッド	20.0	4.1
39	A2グリッド	24.0	10.3
40	A2グリッド	20.0	11.5
41	A2グリッド	11.0	7.4

番号	グリッド	径	深さ
42	A2グリッド	20.0	12.4
43	A2グリッド	24.0	13.0
44	A2グリッド	23.0	8.0
45	A2グリッド	18.0	4.2
46	A2グリッド	86.0	21.4
47	A2グリッド	18.0	3.0
48	A2グリッド	14.0	3.0
49	A2グリッド	31.0	21.7
50	A2グリッド	14.0	3.0
51	A2グリッド	10.0	2.0
52	A2グリッド	13.0	2.8
53	A3グリッド	52.0	17.8
54	A3グリッド	13.0	7.2
55	A3グリッド	14.0	3.6
56	A3グリッド	94.0	4.6
57	A3グリッド	46.0	12.6
58	A3グリッド	28.0	13.0
59	A3グリッド	32.0	15.4
60	A3グリッド	53.0	42.2
61	A3グリッド	40.0	19.8
62	A3グリッド	66.0	10.6
63	A3グリッド	23.0	3.8
64	A3グリッド	25.0	14.6
65	A3グリッド	30.0	6.2
66	A3グリッド	56.0	37.2
67	A3グリッド	18.0	9.4
68	A3グリッド	25.0	9.0
69	A3グリッド	41.0	19.6
70	A3グリッド	20.0	5.4
71	A3グリッド	96.0	19.6
72	A3グリッド	26.0	18.0
73	A3グリッド	20.0	8.8
74	A3グリッド	40.0	2.6
75	A3グリッド	19.0	6.6
76	A3グリッド	15.0	8.2
77	A3グリッド	18.0	4.8
78	A3グリッド	42.0	47.6
79	A3グリッド	36.0	10.8
80	A3グリッド	33.0	19.2
81	A3グリッド	27.0	32.6
82	A3グリッド	29.0	13.0

中世ビット群観察表(2)

番号	グリッド	径	深さ
83	A3グリッド	66.0	13.0
84	A3グリッド	12.0	8.2
85	A3グリッド	128.0	27.6
86	A3グリッド	19.0	7.4
87	A3グリッド	40.0	29.0
88	A3グリッド	82.0	25.0
89	A3グリッド	42.0	20.0
90	A3グリッド	18.0	8.8
91	A3グリッド	40.0	24.0
92	A3グリッド	18.0	10.7
93	A3グリッド	20.0	12.8
94	A3グリッド	24.0	6.4
95	A3グリッド	28.0	47.6
96	A3グリッド	17.0	10.8
97	A3グリッド	46.0	15.0
98	A3グリッド	26.0	5.0
99	A3グリッド	28.0	6.8
100	A3グリッド	28.0	3.2
101	A3グリッド	19.0	5.0
102	A3グリッド	22.0	11.0
103	A3グリッド	33.0	11.4
104	A3グリッド	30.0	20.2
105	A3グリッド	17.0	11.0
106	A3グリッド	20.0	13.8
107	A3グリッド	20.0	18.0
108	A3グリッド	26.0	22.0
109	A4グリッド	20.0	10.8
110	A4グリッド	22.0	4.0
111	A4グリッド	30.0	7.4
112	A4グリッド	14.0	9.9
113	A4グリッド	17.0	3.0
114	A4グリッド	21.0	3.8
115	A4グリッド	47.0	13.9
116	A4グリッド	30.0	9.3
117	A4グリッド	18.0	20.5
118	A4グリッド	35.0	12.3
119	A4グリッド	39.0	12.7
120	A4グリッド	33.0	10.9
121	A4グリッド	29.0	2.5
122	A4グリッド	64.0	19.3
123	A4グリッド	20.0	18.6

番号	グリッド	径	深さ
124	A4グリッド	16.0	4.8
125	A4グリッド	23.0	14.0
126	A4グリッド	32.0	25.7
127	A4グリッド	50.0	7.0
128	A4グリッド	32.0	28.5
129	A4グリッド	40.0	9.7
130	A4グリッド	32.0	14.1
131	A4グリッド	40.0	21.3
132	A4グリッド	40.0	18.4
133	A4グリッド	89.0	16.3
134	A4グリッド	26.0	9.3
135	A4グリッド	34.0	7.0
136	A4グリッド	44.0	11.0
137	A4グリッド	33.0	9.4
138	A4グリッド	26.0	8.7
139	A4グリッド	35.0	8.4
140	A4グリッド	31.0	14.7
141	A4グリッド	22.0	11.9
142	A4グリッド	38.0	19.2
143	A4グリッド	28.0	18.2
144	A4グリッド	51.0	11.2
145	A4グリッド	41.0	14.4
146	A4グリッド	28.0	5.1
147	A4グリッド	30.0	18.5
148	A4グリッド	26.0	15.1
149	A4グリッド	68.0	20.1
150	A4グリッド	50.0	19.7
151	A4グリッド	54.0	7.1
152	A4グリッド	55.0	44.2
153	A4グリッド	30.0	14.3
154	A4グリッド	50.0	17.4
155	A4グリッド	34.0	3.6
156	A4グリッド	52.0	11.0
157	A4グリッド	52.0	7.1
158	A4グリッド	30.0	15.2
159	A4グリッド	48.0	3.5
160	A4グリッド	26.0	13.8
161	A4グリッド	33.0	18.2
162	A4グリッド	34.0	16.4
163	A4グリッド	22.0	10.2
164	A4グリッド	36.0	14.2

(2) 遺物

a. 土製品類

ここでは、土師器皿・小皿、内耳鍋、播鉢と中国産の瀬戸・美濃産の陶磁器、および土錘を取り上げる。

① 土師器皿・小皿

土師器皿は、図化したものが66点である。比較的残りが良く、完形が9点、残存率が90%以上あるものを含めると20点余になる。西区・東区別の出土状況は、西区で13点、東区で47点である。完形のすべては西区になる。土師器小皿は、全部で11点出土している。やはり残存状態がいい。西区では5点、東区では6点出土しほぼ均衡している。

以下グリッド別に見ていく。土師器皿は、西区堀状遺構出土としてA1グリッドで6点検出している。小皿はなかった。A2グリッドでは、土師器皿はなく小皿が4点ある。30-1は油煙痕が残され、灯明皿として使用されていたことが分かる。2がタイプを異にしているが、内底面を最後にユビナデしているなど2-5の成形・調整技法は共通している。

A3-4グリッドでは、土師器皿4点検出した。30-6の土師器皿は、高台が、はがれたような跡があり、また、内底面が窪み、その中央が盛り上がっている。同心円状のロクロ跡が残る。仕上げに泥状の粘土をロクロで器壁に塗り付け、調整している。口縁端面を取りしている。7-9は、ロクロに引上げによって成形している。内面にロクロ痕を明瞭に残し、その後、内底面を押し込むような、指による3-4本の成形痕がある。7-31-2は灯明皿としての使用痕がある。9も仕上げに泥状の粘土をロクロで器壁に塗り付け、調整している。

東区からは、B1グリッドで小皿1点、土師器皿22点出土している。土師器皿の中には非常に特徴的な一群がある。32-15-21の7点で、器形・胎土・調整技法などが完全に一致している。第5章まとめて詳しく触れるが、15・17・19-21の5個には被熱痕があり、熱の受け方がそれぞれでことなる。

32-2-11は、広めの底部から直線的に外傾するタ

イプである。さらに器高が低く、口径も小さい。2・3・5-8は、内底面と口辺部との境目を押し込み、明瞭にさせようとする意図が見える。泥状の粘土を器壁に塗り付けて仕上げている。5は灯明皿としての使用痕がある。9は、底部にスノコ状圧痕が残されている。粘土の泥状仕上げを施す。12・22・23は広めの底部から直線的に外傾するタイプのなかでも、口径が大きく、器高が高い。13の成形技法は、ロクロ引上げ技法によっている。内面に押し込み痕が明瞭である。底部にスノコ状圧痕が残され、また、腰折れ状に屈曲している。この土器は胎土分析に出している。附編2を参照されたい。22の底部は、腰折れ状に屈曲している。泥状の粘土を器壁に塗り付けて仕上げている。23は内底面の中央が盛り上がっている。

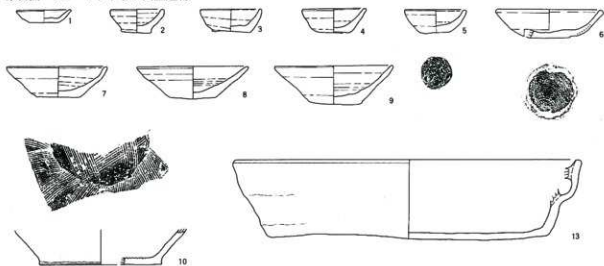
B2グリッドからは、小皿5点、土師器皿19点出土している。37-1・3は内底面に指押し痕があり、成形技法が、土師器皿と共通している。1には油煙痕がある。4・5は形態的に他と異なる。土師器皿の37-6-14・16は、器高が低く、広い底径から口辺が直線的に外傾するタイプである。6・10・11は、胎土が粉状になっていて手につく。10は泥状の粘土を器壁に塗り付けて仕上げている。13・20は油煙痕が残り灯明皿であったことが分かる。内面にロクロ痕を明瞭に残し、底面を押し込むような、指による3-4本の成形痕がある。底部が腰折れ状に屈曲している。

17・19・22は、内底面と口辺部との境目を押し込んで整形している。泥状の粘土を器壁に塗り付けて仕上げている。スノコ状圧痕ではないが、底部に細かい縦線が残されている。19では底抜けて口辺部を形作り、板状の底部を後から貼り付ける手法が観察された。貼り付け痕が明瞭である。

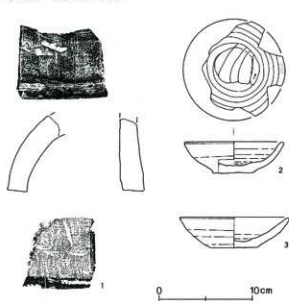
23・24は、ロクロによる引上げ技法によっている。内底面を押し込むような、指による3-4本の成形痕がある。24は、内面にロクロ痕を明瞭に残す。

B3グリッドから2点、B4グリッドから6点の土

第30図 A1~4グリッド出土遺物



第31図 西区出土遺物



A1~A4グリッド出土遺物観察表

番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器	小皿	5.3	1.9	2.9	B	C、G	浅黄橙	100	2Aグリッド	底部余切り 塗傷痕
2	土師器	小皿	5.8	2.5	3.3	B	A、E	浅黄橙	100	2Aグリッド	
3	土師器	小皿 (6.6)	2.5	4.2	B	A、C、H	浅黄橙	70	2Aグリッド		
4	土師器	小皿	6.8	3	3.5	B	E、H	灰白	97	2Aグリッド	口縁部歪み有り
5	土師器	小皿	6.6	2.5	3.2	B	E	灰白	100	3Aグリッド	
6	土師器	皿	11.4	3.6	5.7	B		鈍い黄褐	40	3Aグリッド	底部余切り、高台の剥離痕
7	土師器	皿 (10.8)	3.3	4.6	B	F、E	灰白	70	4Aグリッド	底部窪付き、歪み有り	
8	土師器	皿 (11.8)	3.5	(4.8)	B	G、E	灰白	45	3Aグリッド	歪み有り	
9	土師器	皿 (12.5)	4.1	5.6	B	A、E	浅黄橙	85	3Aグリッド		
10	在地・瓦質	楕鉢	(3.6)	(13.0)	B、E		灰白	10	3Aグリッド		
11	在地・瓦質	楕鉢 (18.5)	(4.5)	(12.0)	A	B	浅黄橙	10	4Aグリッド		
12	常滑	大甕			A		橙、灰黄	20	2Aグリッド		
13	在地・瓦質	内耳鍋 (37.0)	(8.3)	(29.7)			鈍い黄橙	25	西区/飯沼グリッド		

篩器皿が検出された。小皿はない。1・3は内底面の中央が盛り上がっている。42-2・4~6・8・9はロクロによる引上げ技法によっている。内面にロクロ痕を明瞭に残し、底面を押し込むような指による3~4本の成形痕がある。4・5には底部にスノコ状圧痕が残されている。このほか、暗色系の色調や器形が極めて類似している。両者とも胎土分析に出している。詳しくは附編2を参照されたい。7・8の底部は腰折れ状に屈曲している。8・9も胎土分析に出している。

② 内耳鍋

総数は15点である。西区の出土例は、第30図13に図示したが、これは東区B2グリッド破片と接合している。東西区をまたがって接合した唯一の例である。他のすべて東区からの出土である。破片では総数276点出土のうち西区からは6点である。先の接合破片は含

西区出土遺物観察表

番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	残存率	出土位置	備考
1		丸瓦	長さ(7.60)×幅(9.30)×厚さ(2.30)						40	西区	
2	土師器	皿	10.5	3.3	4.3	A	H	灰白	50	西区	油煤痕
3	土師器	皿	(11.6)	3.2	5	A	E, H	灰白	40	西区	底部糸切り

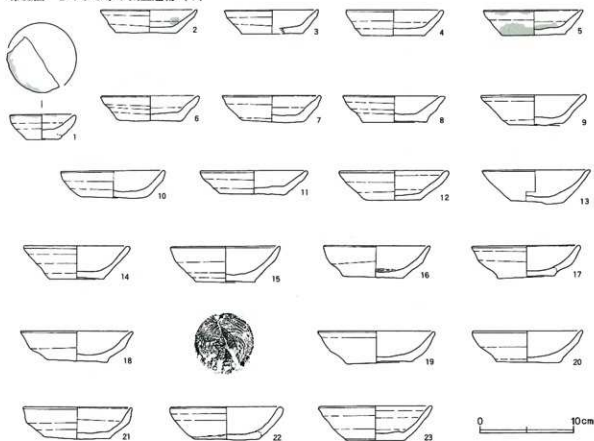
B1グリッド出土遺物観察表(1)

番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器	小皿	(7.0)	2.6	(3.5)	A	A, E	淡橙	45	1Bグリッド	底部糸切り 油煤痕
2	土師器	皿	10.3	2.4	6.5	B	A, E	橙	50	1Bグリッド	油煤痕
3	土師器	皿	10.2	2.5	6.5	B	A, H	鈍い橙	55	1Bグリッド	
4	土師器	皿	10.3	2.8	6.6	B	A, E	橙	75	1Bグリッド	
5	土師器	皿	10.6	2.65	6.9	B	A	鈍い橙	80	1Bグリッド	油煤痕
6	土師器	皿	10.7	2.8	6.7	B	A, C	鈍い橙	93	1Bグリッド	
7	土師器	皿	10.5	2.8	6.4	B	H, A	橙	100	1Bグリッド	口縁部歪み有り
8	土師器	皿	10.9	2.8	6.8	C	A	黄褐	55	1Bグリッド	
9	土師器	皿	11.1	3.3	5.9	B	A, H	鈍い橙	90	1Bグリッド	歪み激しい
10	土師器	皿	11.1	3.1	6.8	C	A	鈍い褐	60	1Bグリッド	
11	土師器	皿	(11.4)	2.5	(6.8)	A	A, H	鈍い橙	45	1Bグリッド	
12	土師器	皿	11.6	3.1	5.7	A	A, C, E	黄灰	65	1Bグリッド	
13	土師器	皿	11.5	3.6	5.6	B	A, H	灰白	70	1Bグリッド	
14	土師器	皿	(11.3)	3.4	5.7	A	A, H	鈍い橙	50	1Bグリッド	底部糸切り?
15	土師器	皿	(11.5)	3.75	6.2	A	C	橙	80	1Bグリッド	底部糸切り、被熱痕
16	土師器	皿	11.3	3.5	6.4	B	H, A, G	鈍い橙	99	1Bグリッド	
17	土師器	皿	11.5	3.5	6.1	C	A	鈍い橙	97	1Bグリッド	被熱痕、口縁部歪み有り
18	土師器	皿	11.9	3.2	6.4	C	A, C	鈍い橙	85	1Bグリッド	
19	土師器	皿	12.4	3.5	7	C	C, H	橙	95	1Bグリッド	被熱痕、歪み有り
20	土師器	皿	11.7	3.4	6.9	B	E	橙	95	1Bグリッド	被熱痕
21	土師器	皿	11.6	3.4	7	B	A, B	鈍い黄橙	100	1Bグリッド	被熱痕
22	土師器	皿	12.0	3.5	7	B	A, H(赤)	橙	100	1Bグリッド	
23	土師器	皿	(10.0)	3.7	6	A	E	鈍い橙	25	1Bグリッド	底部糸切り

まない。グリッド別ではB1グリッドから8点、以下B2で4点、B3グリッドと接合したものの1点が含まれる。B3で1点、B4で2点検出した。どれも残存率が良くない。内耳鍋は大きく深いものと浅いものに分けられる。深いものは、30-13と42-15である。器高8cmを超える。それ以外のは、5cm前後から6cm代である。どれも熱を受けたことによる敲が残り、また、ほとんどで口辺部に煤が付着する。明確に認められないのは33-34の1点だけである。33-28では耳を作る際のユビ跡が明確に観察された。

第33図上では左斜め上から右斜め下に向けて差し込み、指を押し込むようにして引き抜いている。すなわち、左手で内耳鍋本体を立てるような感じで内側を自分のほうに向けて持ち、右手人差し指もしくは中指を入れ、口辺部、つまり持っている位置からすると下に

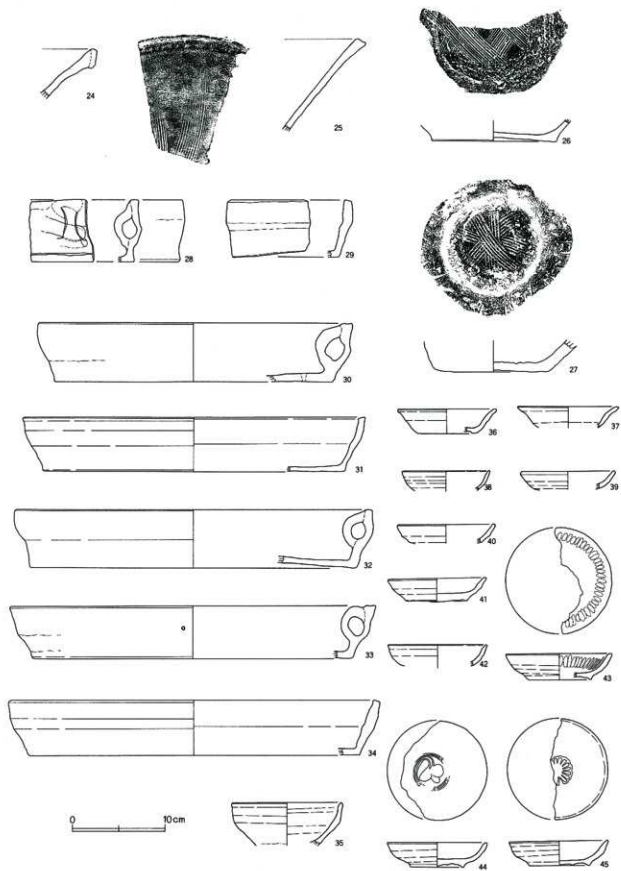
第32図 B1グリッド出土遺物(1)



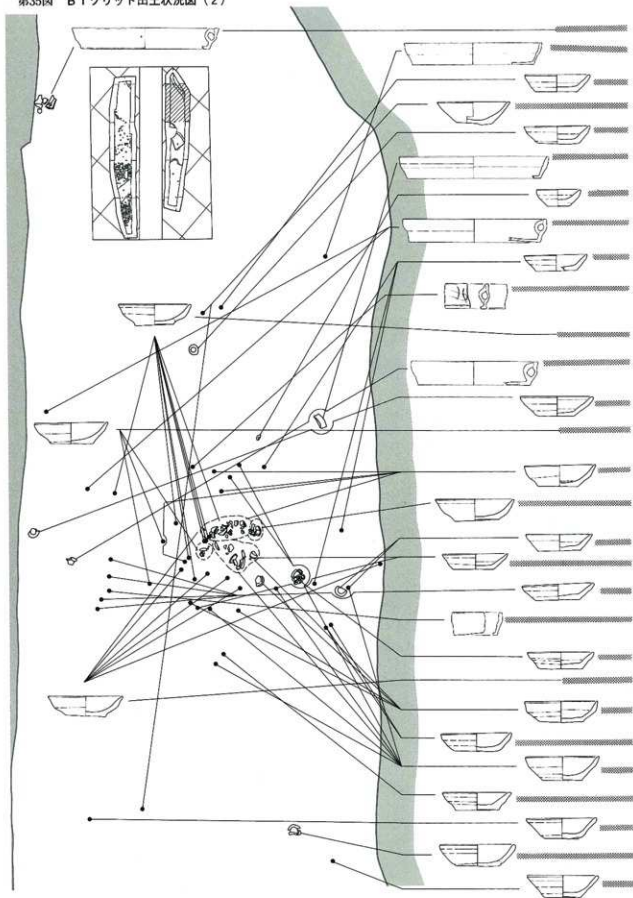
B1グリッド出土遺物観察表(2)

番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	残存率	出土位置	備考
24	瀬戸・美濃	播鉢						青灰	5	1Bグリッド	
25	在地・瓦質	播鉢						灰	10	1Bグリッド	
26	在地・瓦質	播鉢	(2.2)	(13.0)		B	B	灰	10	1Bグリッド	
27	在地・瓦質	播鉢	(3.3)		12	C	C,F	褐灰	20	1Bグリッド	
28	在地・瓦質	内耳鍋		6.45				褐灰	5	1Bグリッド	
29	在地・瓦質	内耳鍋		(6.0)				褐灰	5	1Bグリッド	
30	在地・瓦質	内耳鍋	(33.8)	6.1	(29.6)		E, F	鈍い黄緑	10	1Bグリッド	外側保存者
31	在地・瓦質	内耳鍋	(36.4)	(5.7)	(32.2)	B	E	灰黄	5	1Bグリッド	
32	在地・瓦質	内耳鍋	(38.2)	6.1	(34.8)	B	A, E, H	浅黄緑	20	1Bグリッド	
33	在地・瓦質	内耳鍋	(38.8)	(5.5)	(34.0)	B	F, E	鈍い橙	5	1Bグリッド	
34	在地・瓦質	内耳鍋	(39.4)	5.75	(34.8)	B	A, E	鈍い黄緑	5	1Bグリッド	
35	瀬戸・美濃	天日茶碗	(11.8)	(4.5)		A	G	褐	20	1Bグリッド	16世紀
36	瀬戸・美濃	鉄軸皿	(10.4)	2.5	(6.3)	A		褐	20	1Bグリッド	16世紀
37	瀬戸・美濃	鉄軸皿	(10.6)			A		褐	20	1Bグリッド	16世紀
38	瀬戸・美濃	鉄軸皿	(9.8)			B		黒、褐	10	1Bグリッド	
39	瀬戸・美濃	灰軸皿	(10.0)			B		灰白	10	1Bグリッド	
40	瀬戸・美濃	灰軸皿	(10.4)			B	H	灰キリーブ	5	1Bグリッド	
41	瀬戸・美濃	灰軸皿	10.5	2.5	6	A		灰キリーブ	100	1Bグリッド	
42	瀬戸・美濃	灰軸皿	(10.6)			B	G, F	明キリーブ灰	5	1Bグリッド	
43	瀬戸・美濃	灰軸皿	(11.1)	2.7	(6.6)	B		灰白	40	1Bグリッド	
44	瀬戸・美濃	灰軸皿	(10.6)	2.6	5.6	A		浅黄	70	2Bグリッド/1B	
45	瀬戸・美濃	灰軸皿	(10.5)	(2.6)	(6.0)	A		灰白	50	1Bグリッド	

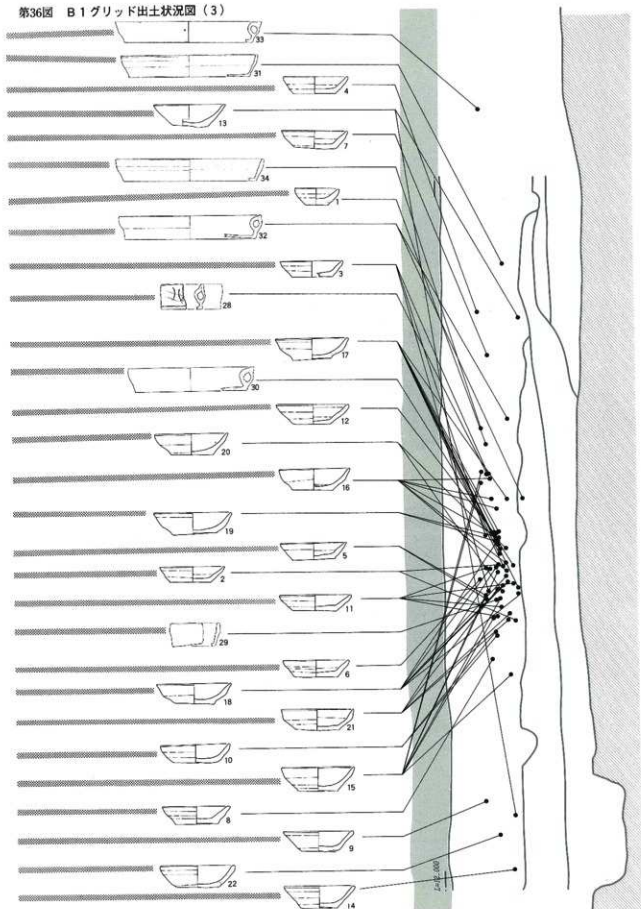
第33図 B1グリッド出土遺物(2)



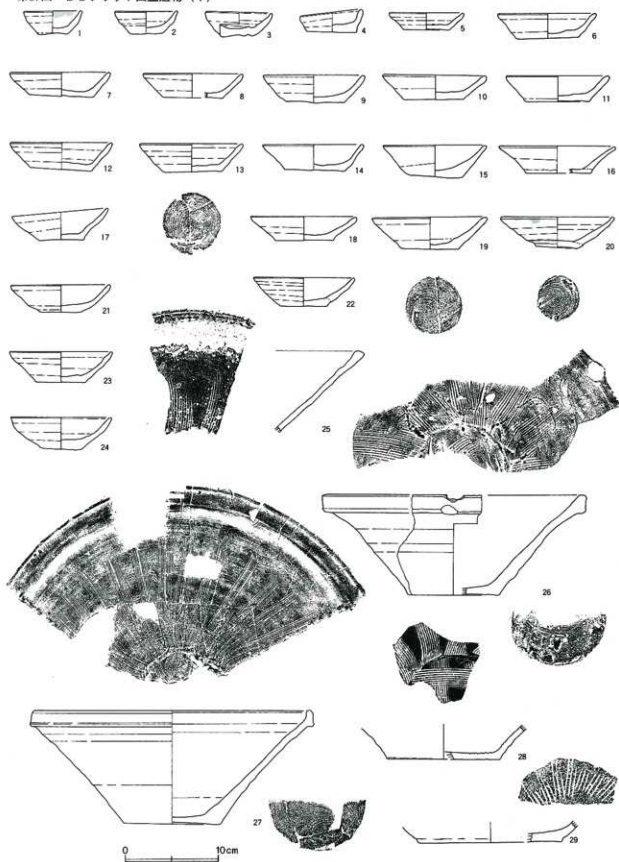
第35図 B1グリッド出土状況図(2)



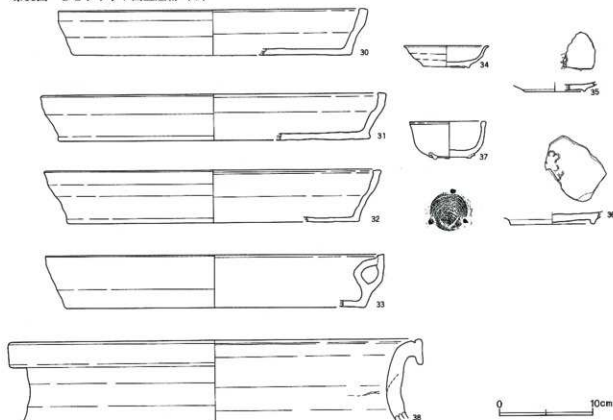
第36図 B1グリッド出土状況図(3)



第37図 B 2 グリッド出土遺物 (1)



第38図 B2グリッド出土遺物(2)



B2グリッド出土遺物観察表(1)

番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	構成	胎土	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器	小皿	6.3	2.4	3.2	B	A	浅黄橙	90	2Bグリッド	油染痕
2	土師器	小皿	6.7	2.4	3.6	B	C	灰白	90	2Bグリッド	蓋み有り
3	土師器	小皿	7.4	2.1	3.4	B	A, H	灰白	100	2Bグリッド	
4	土師器	小皿	6.5	2.4	5.2	C	A, H	鈍い黄橙	95	2Bグリッド	
5	土師器	小皿	8.0	1.8	4.7	B	E, F	黒褐	98	2Bグリッド	底部糸切り痕
6	土師器	皿	10.4	2.7	6.7	B	A	灰白	83	2Bグリッド	
7	土師器	皿	10.8	2.6	6.8	C	A, H	鈍い橙	80	2Bグリッド	
8	土師器	皿	10.8	2.7	6.7	B	A	浅黄橙	80	2Bグリッド	
9	土師器	皿	(10.8)	3.0	(6.4)	A	C	鈍い黄橙	40	2Bグリッド	
10	土師器	皿	11	2.8	6.3	B	A, C	鈍い黄橙	75	2Bグリッド	
11	土師器	皿	11	2.7	6.6	B	A	浅黄橙	85	2Bグリッド	
12	土師器	皿	11	3.0	6.5	A	B	浅黄橙	100	2Bグリッド	底部糸切り
13	土師器	皿	11.1	3.0	6.3	A	A	鈍い黄橙	95	2Bグリッド	油染痕
14	土師器	皿	10.8	2.8	6.3	A	E	鈍い黄橙	90	2Bグリッド	底部糸切り
15	土師器	皿	11	3.4	5.3	B	A, E	浅黄橙	91	2Bグリッド	蓋み有り
16	土師器	皿	(12.3)	2.9	6.9	A	E, H	鈍い橙	45	2Bグリッド	底部糸切り
17	土師器	皿	10.3	3.2	4.8	A	粘質土	鈍い橙	100	2Bグリッド	
18	土師器	皿	11.3	2.6	6.1	C	A, C	浅黄橙	40	2Bグリッド/3Bグリッド	
19	土師器	皿	12.2	3.4	6	A	A	鈍い橙	80	2Bグリッド	口縁部蓋み有り
20	土師器	皿	12.2	3.3	4.3	A	B, G	黄橙	100	2Bグリッド	底部の貼り付け痕明瞭 油染痕
21	土師器	皿	(10.7)	2.9	4.6	B	A, E	鈍い黄橙	50	2Bグリッド	底部高台状段
22	土師器	皿	10.7	3.0	5.0	A	A, F	浅黄橙	97	2Bグリッド	外面クロコ単位明瞭

向って押し込み、押し込みながら引き抜いている、という一連の動作が復元できる。ただし、一方向からだけでなく、両方方向（左右方向）から交互に成形している。33-28の例は、最後の成形痕が明確に残されたということである。この手法はすべての内耳鍋に共通している。耳の位置も口縁部に付くほどの上位に位置している。

ちなみに33-28では、残された押し込みの深さと輪郭から指の太さが復元できる。第一関節あたりで円周約5.3cmである。

出土状況は、B1グリッドでは土師器皿と混在し、レベルもほぼ変わらない状況である。B2グリッドもほぼ同じ状況であるが、地表下30~40cmあたりから出土した浅い一群があり、70~100cmの深い一群がある。前者では、38-31・32があげられる。

③ 播鉢

在地産の瓦質のものや銷軸のかかった瀬戸・美濃産のものがある。総数15点のうち、瀬戸・美濃産4点、在地産11点である。

西区ではA3グリッドから1点（30-10）、A4グリッドから1点（30-11）の都合2点出土している。どれも瓦質土器で底部の破片である。30-10は、東区B2グリッド出土の37-28に極めて類似している。同

一個体の可能性があるが確証を得ない。30-11には使用痕がない。

B1グリッドからは、4点出土している。うち33-24は銷軸のかかった瀬戸・美濃産である。口縁部縁帯はほぼ垂直に垂下する。下方部があまり引き出されていない。縁帯幅は1.5cmである。時期は大窯Ⅱ期に当たる。ほかは瓦質の縁帯のない在地産である。底部内面の樽目は「#」と「米」である。

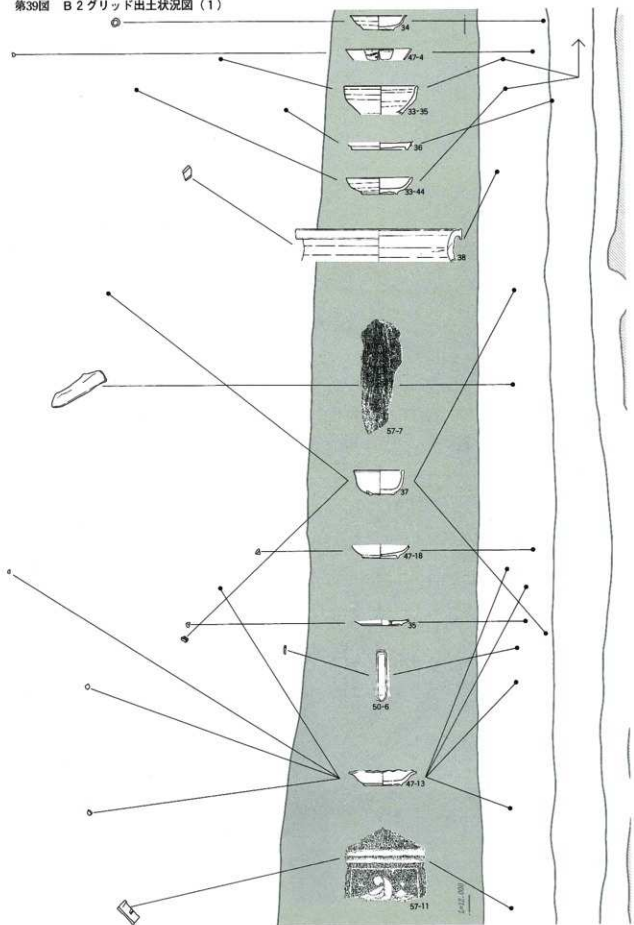
B2グリッドからは、グリッド別では最も多く5点出土した。瀬戸・美濃産は2点出土し、ほぼ器形の内容がわかる。37-26は口縁部がほぼ垂直に垂下する。縁帯幅は1.5cmである。樽目は15本程度である。使用痕がない。大窯Ⅱ期である。37-27は、縁帯下方部がやや外側に引き出され、口縁部の上面が丸くなり、面取りがされていない。樽目は10本ほどである。縁帯の幅は、1.5cmである。大窯Ⅲ期である。両者とも底部糸切り末調整である。37-29は土師質の播鉢であるが、樽目の単位が3本と極端に少ない。37-28の底部内面の樽目は「#」である。

B3グリッドからは3点出土している。どれも瓦質の播鉢である。内底面中央が盛り上がっている。42-10の樽目は2.3cm幅に11本ある。42-11は、内底面に特徴有り、中央が盛り上がり、周囲が溝風に巡って

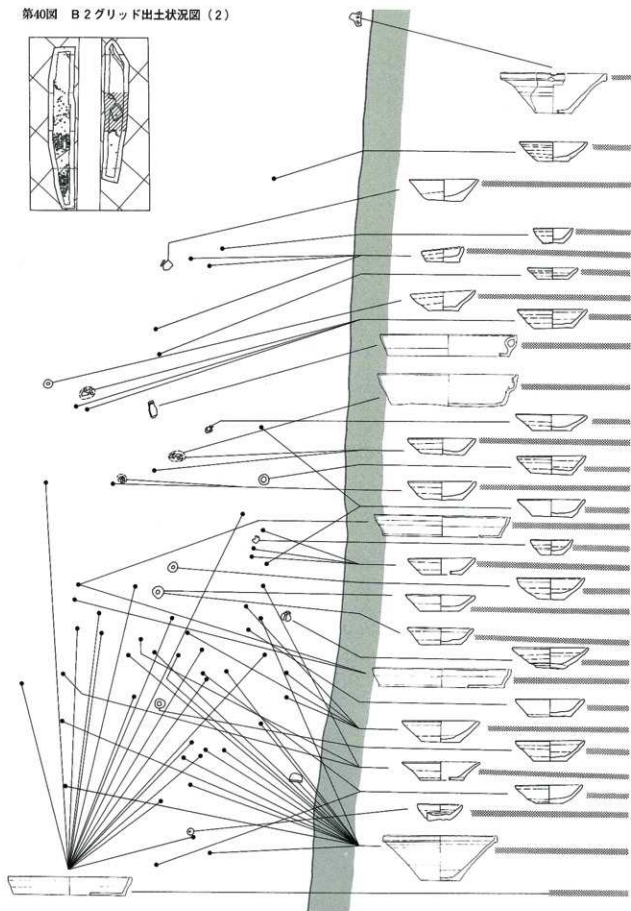
B2グリッド出土遺物観察表(2)

番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	残存率	出土位置	備考
23	土師器	皿	11.0	3.25	5.3	A	B, G	褐灰	100	2Bグリッド	底部糸切り
24	土師器	皿	10.8	3.5	4.1	A	A, B	鈍い橙	100	2Bグリッド	底部糸切り
25	在地・瓦質	播鉢						灰	10	2Bグリッド	16世紀
26	瀬戸・美濃	播鉢	(28.0)	10.5	(9.7)	A	B	暗赤褐	20	2Bグリッド	
27	瀬戸・美濃	播鉢	(30.0)	11.8	(10.2)	A	なし	灰	40	2Bグリッド	
28	在地・瓦質	播鉢		(3.7)	(12.0)	A	B, C	灰	5	2Bグリッド	
29	在地・瓦質	播鉢		(2.3)	(15.4)	B	B	明褐	5	2Bグリッド	16世紀
30	在地・瓦質	内耳鍋	(33.0)	(4.9)	(29.5)	B	E, H	褐灰	30	2Bグリッド	
31	在地・瓦質	内耳鍋	(36.8)	4.9	(33.0)	B	E	灰黄褐	20	2Bグリッド	
32	在地・瓦質	内耳鍋	(35.7)	(5.5)	(30.9)	B	E, H	灰白	20	2B/3Bグリッド	
33	在地・瓦質	内耳鍋	(36.0)	5.5	(32.0)	B	B, E	褐灰	5	2Bグリッド	16世紀
34	瀬戸・美濃	灰輪皿	9.0			A		灰黄	95	2Bグリッド	
35	瀬戸・美濃	灰輪皿			(6.2)	B	C	浅黄	5	2Bグリッド	
36	瀬戸・美濃	灰輪皿			(9.0)	B	G	浅黄	10	2Bグリッド	
37	瀬戸・美濃	香炉	(8.1)	3.7	3.8	A	C	灰、灰白	50	2Bグリッド	15世紀 底部糸切り
38	常滑	大甕	(44.2)			A		灰キープ	5	2Bグリッド	

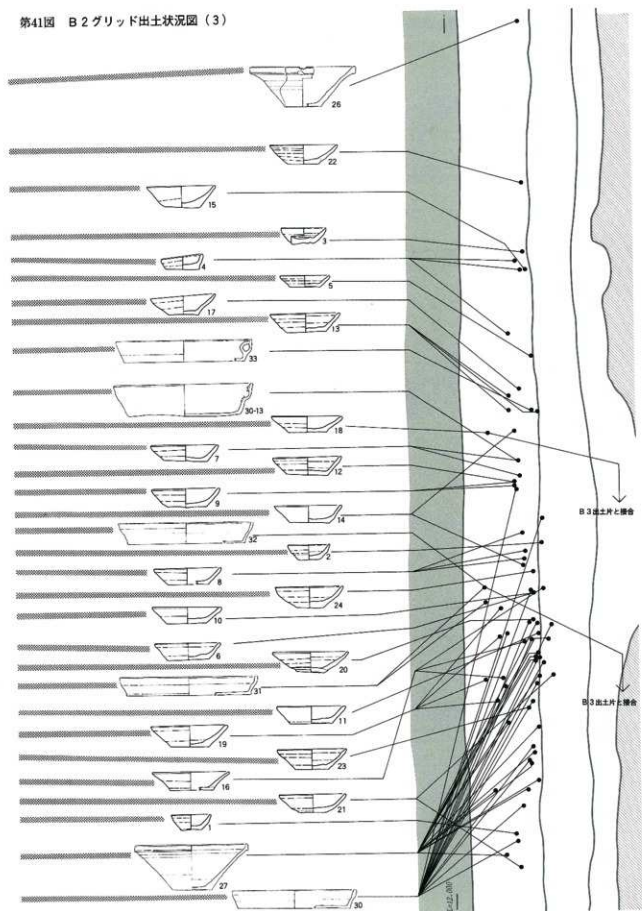
第39図 B2グリッド出土状況図(1)



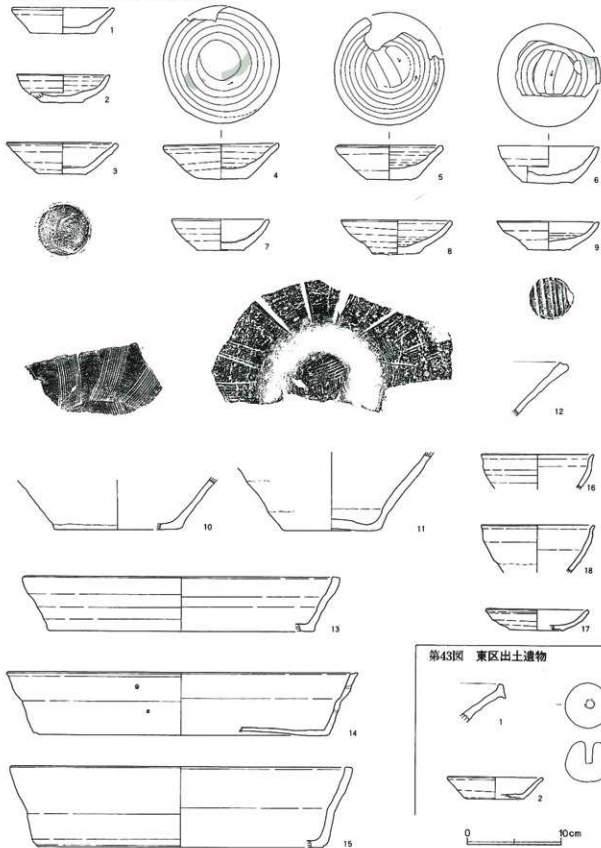
第40図 B2グリッド出土状況図(2)



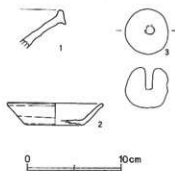
第41図 B2グリッド出土状況図(3)



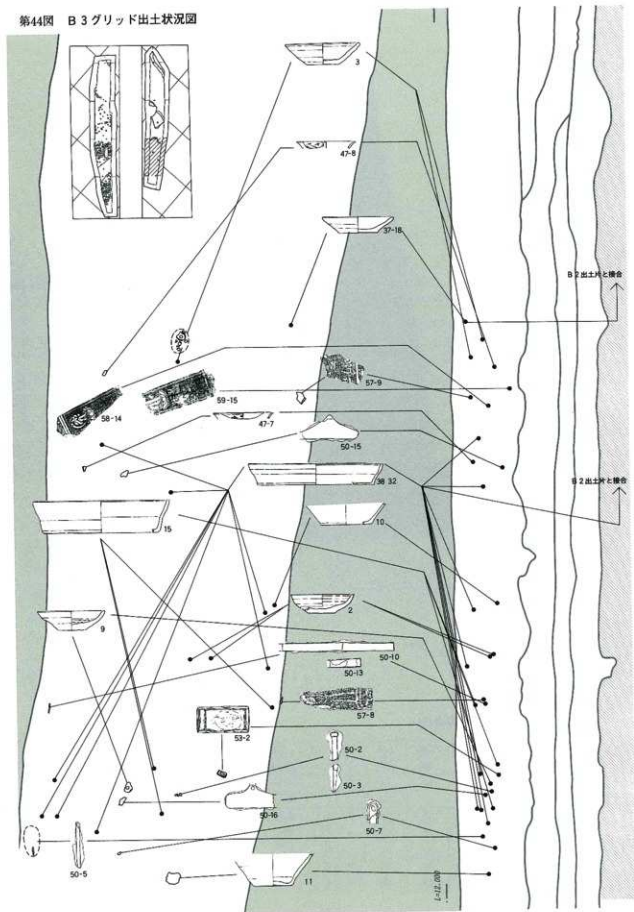
第42図 B3・B4グリッド出土遺物



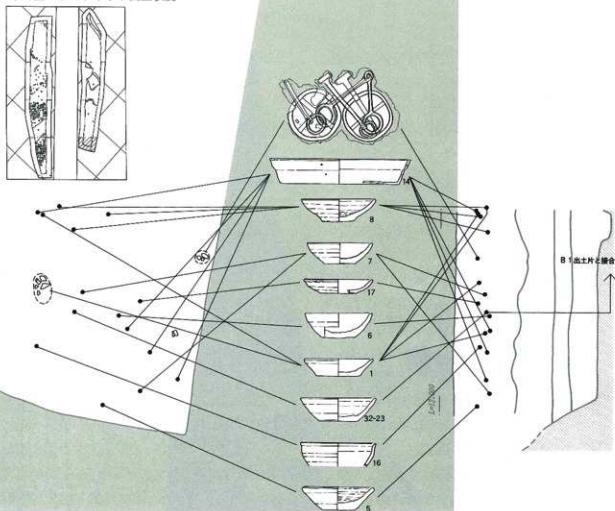
第43図 東区出土遺物



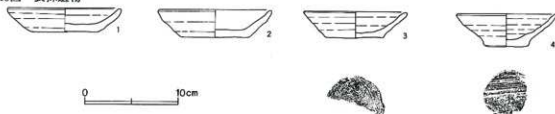
第44図 B 3 グリッド出土状況図



第45図 B 4 グリッド出土状況



第46図 表採遺物



B 3・B 4 グリッド出土遺物観察表(1)

番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器	皿	11.0	2.7	6.7	A	A	鈍い黄褐色	80	4Bグリッド	底部糸切り
2	土師器	皿	10.0	2.9	4.4	B	E	灰白	75	3Bグリッド	
3	土師器	皿	12.0	3.3	5.1	B	G	鈍い橙	80	3Bグリッド	底部糸切り
4	土師器	皿	12.4	3.8	5.6	B	E	黄灰	100	4Bグリッド	油煤痕
5	土師器	皿	11.5	3.6	4.7	A	C	褐灰	73	4Bグリッド	油煤痕
6	土師器	皿	(10.7)	3.9	5.2	A	E	灰白	30	4Bグリッド	油煤痕
7	土師器	皿	(10.5)	3.2	5.0	B	E	浅黄褐色	50	4Bグリッド	内側割離、底部糸切り
8	土師器	皿	(11.8)	(4.4)	3.6	A	E	浅黄褐色	70	4Bグリッド	煤少し残る

る。樽目は2cm幅に6本ある。42-12は口縁部の小破片である。東区の表採で瀬戸・美濃の鐏鉢が出土した(43-1)。鐏鉢がかかる。緑帯が垂直方向に垂下せず、やや角度をもっている。緑帯の下方部がいくぶん延びている。大窯Ⅲ期である。

最後に内底面の樽目形をまとめておく。15点のうち樽目のわかるものは7点ある。内訳は「井」が4点、「米」が1点、3本単位の放射状が1点で、以上が瓦質土器である。瀬戸・美濃では中心に向けて数単位入れているものが1点であった。

④ 陶磁器

陶磁器類の占める割合は高い。ここでは、瀬戸・美濃産の灰釉皿・鉄釉皿、天目茶碗、香炉、常滑産の甕と中国産で龍泉窯系の染付・青磁・白磁を取り上げる。

灰釉陶器は小破片を含むと26点出土している。ほとんどがB1・2グリッド出土である。そのうち完形、ほぼ完形2点を含む10点を載せた。B1が6点、B2

が3点、B1・2グリッド接合が1点である。

33-39・42は丸皿である。33-40・41は後皿である。40は部分的に釉薬が剥がれている。42は、高台内部に釉薬をかけていない。33-43はソコをいれた丸皿である。33-44は後皿で見込みに印花文を施す。釉調がやや黄色味がかっている。33-45はやはり後皿で、見込み部に菊印花文を施す。38-34は、やや径の小さい端反りの後皿である。貫入が入っている。38-35は丸皿である。見込みに菊印花文を施す。38-36は皿である。見込みに菊印花文を施すが、印刻がやや深い。高台は削り出して内傾斜している。

鉄釉の皿は4点である。B1グリッドで2点、B4で1点である。33-36は後皿で、全面釉されている。高台は内削り込み高台である。釉薬は黒と茶の斑になっている。33-37は端反りの丸皿である。全面釉を施す。釉薬は、黒と茶の斑である。33-38は丸皿である。全面釉で、釉薬は黒と茶の斑になっている。42-17は丸皿である。高台は、内削り込み高台である。

B3・B4グリッド出土遺物観察表(2)

番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	残存率	出土位置	備考
9	土師器	皿	10.8	3	4.5	B	E	灰白	90	3Bグリッド	
10	在池・瓦質	鐏鉢		(5.2)	(13.0)	A	A	灰	10	3Bグリッド	
11	在池・瓦質	鐏鉢		(8.3)	10.6	C	B、F	褐灰	20	3Bグリッド	
12	在池・瓦質	鐏鉢						灰	5	3Bグリッド	16世紀
13	在池・瓦質	内耳鍋	(33.8)	5.7	(28.2)	B	E、II	褐灰	5	4Bグリッド	
14	在池・瓦質	内耳鍋	(37.4)	6.7	(30.7)	B	E、H	明褐色	15	4Bグリッド	
15	在池・瓦質	内耳鍋	(36.4)	8.4	(30.4)	B	A、B	黄灰	5	3Bグリッド	
16	瀬戸・美濃	天目茶碗	(12.0)			B		紫黒	5	4Bグリッド	
17	瀬戸・美濃	鉄釉皿	(10.9)	(2.2)	(5.7)	A		灰黒	30	4Bグリッド	16世紀

東区出土遺物観察表

番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	残存率	出土位置	備考
1	瀬戸・美濃	鐏鉢						紫黒	5	東区	16世紀
2	瀬戸・美濃	鉄釉皿	10.1	2.3	6.3	A	C	暗褐色	50	東区	
3	土師器	不明				A		鈍い黄褐色	100	東区	

表採出土遺物観察表

番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	残存率	出土位置	備考
1	土師器	皿	(12.1)	2.50	7	B	A、H	鈍い橙	60	表採	
2	土師器	皿	(12.0)	2.85	(7.2)	B	A	黄橙	30	覆土	
3	土師器	皿	(10.9)	2.75	(6.0)	A	E、H	浅黄橙	50	不明	底部糸切り
4	土師器	皿	(10.10)	3.75	(6.1)	A	E、H	浅黄橙	51	不明	底部糸切り

天目茶碗は3点である。B2・3・4グリッドからそれぞれ各1点づつである。すべて破片であり、高台の形態はわからない。33-35は二度掛けしている。錆軸は色調が極めて薄い。鉄軸皿に似て軸調が黒と茶の斑模様である。42-16は口縁部が玉緑である。軸葉は銚色の漆黒である。42-18は二度掛けしている。35同様錆軸は色調が極めて薄い。軸葉は銚色の漆黒である。

染付は、微細な細片まで含めると25点で出土した。うち11点を第47図に載せている。西区のA3グリッドに1点、不明1点の他は、すべて東区出土である。B1に5点、B2に1点、B3に3点である。47-1は碗である。内面口縁部に界線、外面に界線、点状の斑紋施す。2は皿である。大型の渦文を胴部に施す。3は皿である。内面見込みに草花文、高台に界線を施す。4は碗である。5-11は端反りの皿である。5は外面の口縁部界線と胴下半部界線との間に、唐草文を施す。6-8は外面に界線、唐草文をほどこす。9-11は濃密な渦文を外面前面に施す。

青磁は5点、白磁は1点出土した。グリッドでは、青磁がA3で1点、B1で2点、B3で1点、不明1点である。白磁はB2グリッドであった。13・14・17は青磁皿である。軸調がそれぞれ微妙に異なる。15・16は碗である。15は胴部に連弁文をもつ。18は白磁の小皿である。削りだしの高台を持つ。

⑤ 土錘

土錘は27点検出した。西区13点、東区14点である。平安時代の遺構であるSD1は、中世の段階では遺構として明確でなかったが、中世遺物の出土状況から、完全に埋まりきっていなかったか、あるいは、その後沈下した結果かもしれない。49-1-12のA3グリッド出土としたものは、この斜面に沿って検出された。

東区ではB1から2点、B2から3点、B3から6点、B41点とややばらけている。B3グリッドの6点のうち、4点は穿孔されていない。形状も円柱状で他の例と明らかに異なる(49-24-27)。また、やや大型の49-17-20もひとつのタイプを作っている。出土位置は、東区表採として2点、B3・B4からそれぞ

れ1点づつとなっていて、ある程度離れている。

b. 金属製品

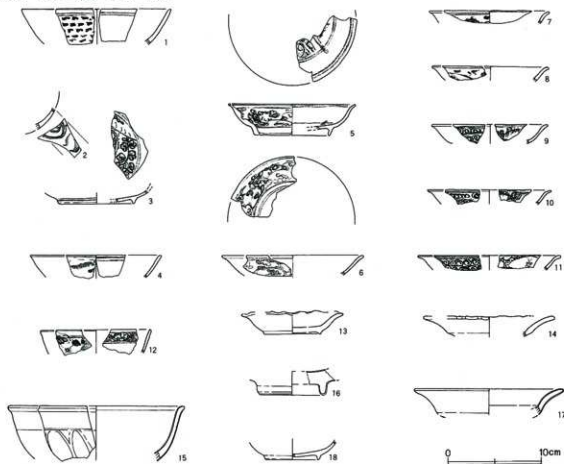
① 鉄製品

鉄製品は21点出土している。内訳は釘が最も多く5点、小柄4点、火打ち金3点、毛抜き2点、弾丸2点、轡1点、小札1点、包丁と思われるもの1点、不明が2点である。西区からは出土していない。東区のグリッド別に見てみると、B1が8点、B3が9点あり、ここのだけで17点にのぼる。B3グリッドの遺物の出土状況はB4グリッド側によっており、B4の轡もB3に含まれると考えられる。

50-6の毛抜き錆腐食が激しいが、完形である。支点部分の形状がコの字形をしており、7のUの字形と対照を成している。8の小札は漆が塗られている。内部の鉄板はあまり残らず、表面の漆が良好に残されている。漆に残された剥離痕から、小札を縦じあわせた様子が観察できる。図を正位とすると、左側を上にして順次重ねあわせている。10・11・13・14は小柄であるが、14などは目釘穴があるにもかかわらず、片刃を呈している。15-17は火打ち金である。17はほぼ完形で、使用痕がない。9・18・19は用途不明である。19は鉄製品に入れたが、緑青をふいているので、銅製品あるいは銅合金製品である可能性がある。20の轡は十文字轡と呼ばれるものである。十文字轡は、古くは13世紀末の絵巻物などに登場するが、主流は室町時代後期から近世にかけてである。腐食が激しいが、ほぼ全体を残している。二連の銜から円形の銜先を介して、十文字状の鏡板に接続している。さらに、遊金から引手が接続している。引手壺は、継ぎ目のない楕円形をしている。一方は欠損していた。立開・立開壺も一方を欠損しているが、もう一方は残されていた。切れ目のない立開壺である。

21・22の弾丸は、B1グリッドからレベルを同じくし、近接して出土した。21の表面は緑青色しており、大きさがさほど変らないが重さが違うことから、銅合金の可能性もある。22には鈍型の合わせ口の痕が明確に残されている。また、擦痕らしきものがあり、使

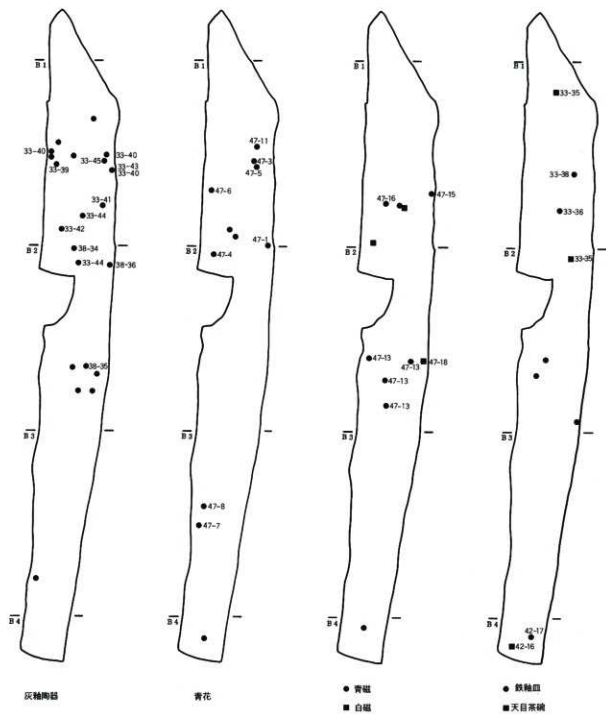
第47図 染付・青磁・白磁・五彩



染付・青磁・白磁・五彩観察表

番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	焼成	胎土	色調	残存率	出土位置	備	考
1	中国・染付	碗	(16.0)			B		明青灰	5	1Bグリッド		
2	中国・染付	皿						明青灰	5	表採		
3	中国・染付	皿	(11.0)	(1.2)	(8.0)	B		明青灰	10	1Bグリッド		
4	中国・染付	碗	(14.0)			B		明青灰	5	2Bグリッド		
5	中国・染付	皿	(13.6)	3.25	(8.0)	B		明青灰	20	1Bグリッド		
6	中国・染付	皿	(14.8)					明青灰	5	1Bグリッド		
7	中国・染付	皿	(12.0)			B		明青灰	5	3Bグリッド		
8	中国・染付	皿	(12.4)			B		明青灰	5	3Bグリッド		
9	中国・染付	皿	(7.0)			B		明青灰	5	3Bグリッド		
10	中国・染付	皿	(11.5)			B		明青灰	5	3Aグリッド		
11	中国・染付	皿				B		明青灰	10	1Bグリッド		
12	中国・五彩	碗	(12.0)	(2.5)		B		明青灰	10	不明		
13	中国・青磁	皿	(10.8)	2.50	(6.0)	B		オリーブ灰	20	2Bグリッド		
14	中国・青磁	皿	(14.0)			A		緑灰	20	3Aグリッド		
15	中国・青磁	碗	(18.2)			A		オリーブ灰	20	1Bグリッド		
16	中国・青磁	青磁碗			(6.8)	A		オリーブ灰	5	1Bグリッド		
17	中国・青磁	青磁皿	(15.9)			A		オリーブ灰	15	不明		
18	中国・白磁	白磁皿			(6.6)	A		灰白	15	2Bグリッド		

第48图 东区陶磁器出土分布状况



用の痕をうかがわせる。

② 古銭

古銭は、33点出土した。うち拓本に耐えられないものや、銭貨名の全く分からないものを除き、15点載せた。52-2は二枚が重なっている。

出土位置では、B1グリッド1点、不明6点のほかは、すべてB3グリッドである。1・5・7・13は同一地点出土である。他3・6・9・15は同一地点ではないが、B4グリッド寄りの道路側寄りから、直径約2mの範囲内にある程度まとまって出土している。出土位置不明の2・4・8・10~12は、B3出土のものと銭貨の種類がすべて共通することから、B3グリッド出土と考えていい。不掲載分もB3グリッドに集中している。また、時期別では北宋銭が7点、明銭が7点、不明1点である。

1・2は祥符元宝である。初铸年は1009年で、北宋である。3は嘉祐通宝、1056年が初铸年で、北宋銭である。篆書であった。4・5熙寧元宝で1068年が初铸年、北宋である。篆書であった。6は元豊通宝である。1078が初铸年、北宋銭で篆書である。これだけがB1グリッド出土である。7は昭聖元宝。1094年初铸で、北宋銭である。行書であった。8以降が明銭になる。8・9は洪武通宝である。1368が初铸年である。10~14は永楽通宝であり、初铸年が1408年である。15の銭貨名は不明である。

c. 石製品

① 硯・石臼類・砥石

硯は2点出土している。53-1は、外面・内面形態とも長方形の長方硯である。硯頭部縁帯幅は狭い。裏面は硯頭部から硯尻にかけて抉りを入れている。長さ：幅の比率は、1:1.473である。石材は、粘板岩である。B1グリッドから検出された。2もやはり長方硯である。1より長いめ細く感じるが、ほぼ同じ幅である。硯頭部縁帯幅がやや広くなっている。陸部が楕円形に摩滅し、長期にわたり使用されていたことがわかる。長さ：幅の比率は、1:2.078である。石材は、粘板岩である。B3グリッドから検出された。

石臼類は8点出土している。内訳は通用の碾き臼3点、茶臼5点である。すべてB1グリッドからの出土である。53-3は凹面に溝切りが施してあり、上臼である。対して、5は凸面にあり下臼である。両者は石材が全くことなり、大きさも微妙に違うが、かみ合わせは悪くない。仮に両者が一体のものだとすると、わざわざ石材を合わせる必要がなかったか、あるいは機能面からあえてそろえない、というような意外な側面が見える。5は、残りが悪く凹面をわずかに観察することができるに過ぎない。

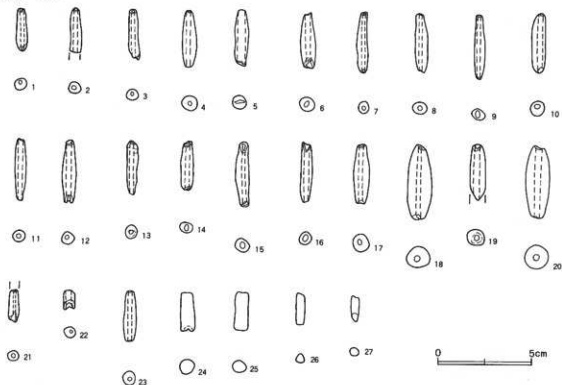
砥石は5点出土しているが、一つとして同じグリッドから出土したものはなく、散在している。石材はすべて稜岩である。

② 板碑

板碑は、銘文がわずかでも観察されるものすべてを載せた。15点を数える。遺物の少ない西区から4点出土している。ただし、どれも小片であった。55-2・3・5・6がそれである。東区ではB1に4点、B2に2点、B3に4点、他東区内の地点不明が1点ある。東区では7・14・15などの大型品を含む。14・15はB3グリッド出土である。

1は銘文に「法□」が見える。6の二条線、枠線の下「南無□」とあり、銘文のつながりはいいのだが、石が全く異なる。2は枠線下に主尊種子の上部がわずかに残されている。彫りは深く、葉研彫りである。3は銘文不明であるが、彫りが深い。4は山形と二条線のみで銘文はない。二条線もあまり深くない。5は「□妙賢□」と読める。5・6とも線彫りである。7は「鬼子母神(天文)□「南無妙法蓮華経日性聖位」羅刹女正月十五日」とある。紀年部分がはっきりしないが、天文とすると1532~54年ということになる。8は花瓶とも考えられるが確かではない。9・13光明真言が記されている。10は十千の「甲(きのえ)」と考えられる。甲だけでは年代の参考にならない。11は山形・二条線・枠線までの上端部がほぼ完全に残されている。全体はないが、主尊種子はキリクである。二条線は深く主尊も葉研彫りである。12も葉研彫りで深い。

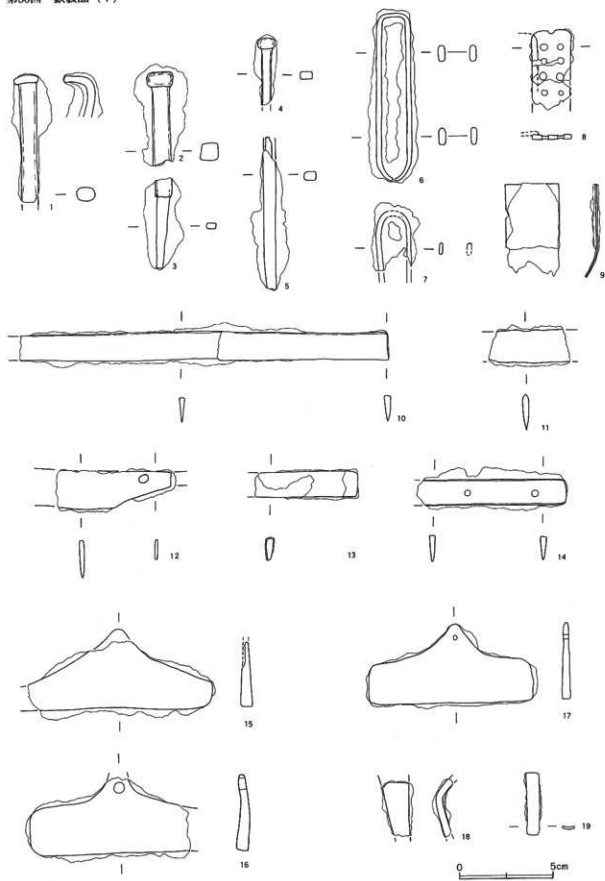
第49図 土鐘



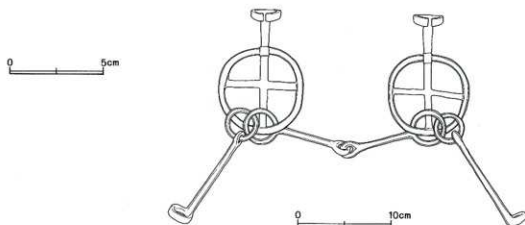
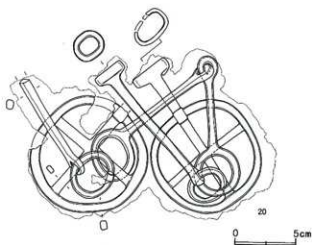
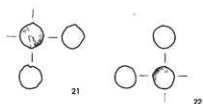
土鐘観察表

番号	器種	長さ	幅	重量/g	孔径	出土位置	備考
1	土鐘	(2.25)	0.60	0.67	0.20	3Aグリッド	
2	土鐘	(2.35)	0.65	0.80	0.25	3Aグリッド	
3	土鐘	(2.70)	0.65	0.78	0.15	3Aグリッド	
4	土鐘	3.00	0.80	1.42	0.15	3Aグリッド	
5	土鐘	2.95	0.75	1.06	0.50	3Aグリッド	
6	土鐘	2.90	0.80	1.48	0.25	3Aグリッド	
7	土鐘	3.20	0.60	1.01	0.20	3Aグリッド	
8	土鐘	3.10	0.70	1.13	0.20	3Aグリッド	
9	土鐘	3.40	0.60	1.24	0.20	3Aグリッド	
10	土鐘	3.15	0.75	1.58	0.30	3Aグリッド	
11	土鐘	3.35	0.70	1.02	0.20	3Aグリッド	
12	土鐘	3.25	0.70	1.60	0.20	3Aグリッド	
13	土鐘	2.90	0.60	1.35	0.20	4Aグリッド	
14	土鐘	2.55	0.65	1.04	0.20	1Bグリッド	
15	土鐘	3.45	0.80	1.88	0.25	2Bグリッド	
16	土鐘	3.15	0.60	1.21	0.30	3Bグリッド	
17	土鐘	3.15	0.90	1.96	0.20	3Bグリッド	
18	土鐘	3.90	1.25	5.05	0.40	4Bグリッド	
19	土鐘	(2.95)	0.85	1.85	0.35	東区	
20	土鐘	3.85	1.30	4.38	0.30	東区	
21	土鐘	(1.75)	0.60	0.56	0.20	2Bグリッド	
22	土鐘	(1.00)	0.60	0.41	0.15	2Bグリッド	
23	土鐘	2.60	0.70	1.41	0.20	1Bグリッド	
24	土鐘	2.05	0.80	1.11		3Bグリッド	
25	土鐘	2.05	0.80	0.80		3Bグリッド	
26	土鐘	1.65	0.40	0.30		3Bグリッド	
27	土鐘	(1.30)	0.40	0.20		3Bグリッド	

第50回 鉄製品 (1)

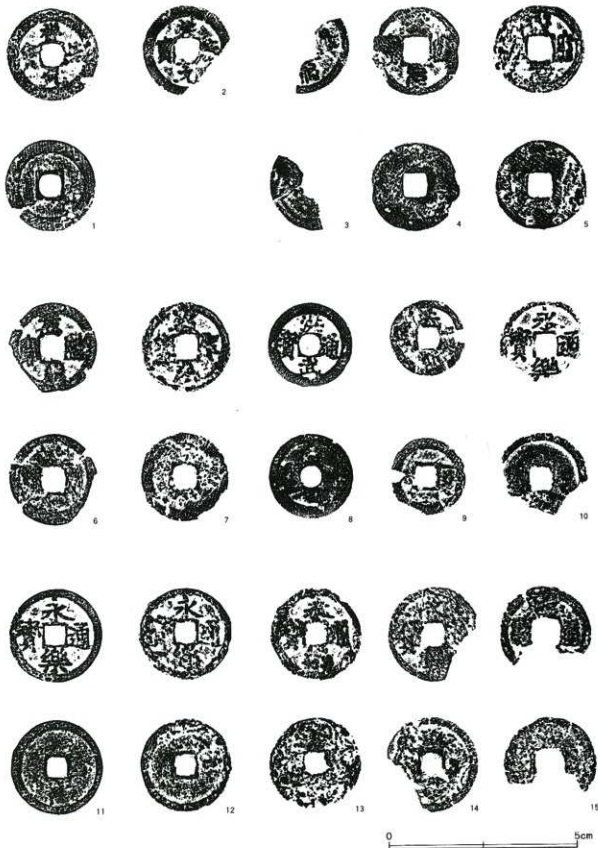


第51図 鉄製品(2)



番号	産地・材質	器種	長さ	厚さ(径)	幅	出土位置	備考
1	鉄製品	釘	(6.80)	0.70	(1.30)	B1グリッド	
2	鉄製品	釘	(5.00)	0.90	(1.50)	B3グリッド	
3	鉄製品	釘	(4.80)	0.30	(0.95)	B3グリッド	
4	鉄製品	釘	(3.55)	0.40	(0.90)	B1グリッド	
5	鉄製品	釘	(8.01)	0.45	(0.60)	B3グリッド	
6	鉄製品	毛抜き	8.80	0.35	1.90	B2グリッド	
7	鉄製品	毛抜き	(3.20)	0.25	(1.90)	B3グリッド	
8	鉄製品	小札	(4.25)	0.30	(2.00)	B1グリッド	漆塗
9	鉄製品	不明鉄板	2.85	0.30	4.90	不明	
10	鉄製品	小柄	(19.80)	0.25	(1.50)	B3グリッド	
11	鉄製品	小柄	(4.39)	0.35	(1.80)	B3グリッド	
12	鉄製品	包丁?	(6.15)	0.20	(2.00)	不明	
13	鉄製品	小柄	(5.50)	0.45	(1.40)	B3グリッド	
14	鉄製品	小柄	(8.00)	0.40	(1.30)	B1グリッド	
15	鉄製品	火打金	(9.90)	0.60	(4.30)	B3グリッド	
16	鉄製品	火打金	(8.60)	0.60	(4.00)	B3グリッド	
17	鉄製品	火打金	8.70	0.40	4.10	B1グリッド	
18	鉄製品	不明鉄器	(2.95)	0.35	(1.40)	B1グリッド	
19	鉄製品	不明	(3.30)	0.15	(0.65)	B2グリッド	
20	鉄製品	轡				B4グリッド	
21	鉄製品	弾丸	1.90		1.30	B1グリッド	
22	鉄製品	弾丸	1.20		1.15	B1グリッド	

第52回 古銭



主尊下の脇侍種子と考えられる。14は上部から山形・二条線・二重の枠線となり、主尊と続く。主尊はキリークで蓮座・光明真言まで確認できる。二条線は深く、主尊・蓮座なども非常に深く彫り込まれている。15はわずかながらではあるが、14よりもさらに大きい。上部が欠損している。二重の枠線で、主尊種子はキリークであり、その下に脇侍種子としてサ(観音菩薩・右)、サク(勢至菩薩・左)、光明真言と続く。紀年銘は「延文六年 辛丑 二月十日」(1361年)とある。さらに、枠線外の基部に「圓新」とある。このような例は珍しく、類例に乏しい。枠線外ということであれば県内では、東秩父村大霊神社所在の題目板碑等がある。大霊神社の例は、枠線直下であり本例の基部そのものではない。

③ 軽石・石

軽石は破片を含めると30点余検出した。すべて磨り面を持っていて使用痕を残す。小さいものは1~2cmというものもあるが、ここではある程度の大きさの13点を図に載せた。出土位置は、西区A4グリッドに1点あるほかは、すべて東区の出土である。特にB1に多く6点、次いでB2に4点ある。

石は、大小さまざま100点程あった。明確な加工痕は残されていないが、もとより沖積地であるため、人為の産物であることは間違いない。大きさの揃っているものを11点載せた。これより大きいものはない。明かす手だてはないが、形状や握り具合など、つぶでの可能性を考える。

古銭観察表

番号	銭名	径/cm	重量/g	初辨年号	出土位置	備考
1	祥符元宝	2.46	2.64	1009	3Bグリッド	
2	祥符元宝	2.38	4.46	1009	不明	
3	嘉祐通宝		0.77	1056	3Bグリッド	
4	熙寧元宝	2.39	2.32	1068	不明	
5	熙寧元宝	2.45	2.87	1068	3Bグリッド	
6	元豊通宝	2.39	1.47	1078	1Bグリッド	
7	昭聖元宝	2.37	2.69	1094	3Bグリッド	
8	洪武通宝	2.39	1.09	1368	不明	
9	洪武通宝	2.05	1.66	1368	3Bグリッド	
10	永楽通宝		1.32	1408	不明	
11	永楽通宝	2.51	2.58	1408	不明	
12	永楽通宝	2.50	2.66	1408	不明	
13	永楽通宝	2.45	2.58	1408	3Bグリッド	
14	永楽通宝	2.50	1.51	1408	3Bグリッド	
15		2.47	1.54		3Bグリッド	